古史傳

自第一段
至第三段

和書門
類 二〇二六
號 五三
函 六
冊 二二
架

183
内閣文庫
和書
類 二〇二六一
號
冊 二二
函 四〇
架 一七

神書函ノ四

内閣文庫
番號 和 20261
冊數 22 (1)
函號 140 183

140-183

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

古史傳一 上卷

平篤胤謹撰
男 鐵胤
孫 延胤 續攷

浅草文庫

神代上 上卷

(カミヨノカミツマキトツマキトイフマキ)

(イニシヘアメツチイマダナラザリシトキニ)

古天地未生出時。於高天原(タカマノハラニ)有
神焉。御名天(ミナハアメノ)御中主神。次高
(ミナカヌシノカミツギニタカ)
皇産靈神。亦名高木神。亦云薦
(ミムスビノカミ)(マタノミナハタカギノカミ)(マタイフコモ)
枕高皇産靈神。此者
(マクラタカミムスビノカミト)(コハ)

所謂神魯岐命也。次神皇産靈神。亦云神産巣日御祖命。亦云神魂大刀自神。此者所謂神魯美命也。此三柱神者。竝獨神成坐而。隱御身矣。

古は伊邇志閑への漢字れア。言義を往方ふて。過ふし昔方戔弘く云語ふア。方を閑と云こゞ。古書よ例多クア。師云諸の言の。然云本の意を釈は甚難きわざふるを。強て解むと以れば必僻免る説の出來るものゆり。古も今も世人の釈る説ども。十ふ八九を當ら説れみれア。凡て皇國れ古言も。多く其物其事れの形れまゝふ易く云初名ふけ初さる言ふして。更よ深き理ふどを思ひて。言る物う者。その上代の言語の本ふけるを以て釈べきわざふ故よ。世くの識ば。其意ば不を非きゞ。ひさぶるふ漢意ふらひて釈也ふ。總て當アゲさし。彼漢國も上代れ言の本ゞ。ちしもふちさくゞ非ざアゞむを。彼國風と。何事ふも多く理と云物を先ふて。言の意を釈ふも多く其理を旨とせる故ふ。皆強ふて説ふふをやかくて近きころ古学始まアてゞ。漢意を以て釈ふれと悪きをば。曉れる人も有て。古意もて釈ゞは。ゞ免れゞ。其將説得るふとは。猶稀ふふむ有々流。然ゆて。將ひさぶるふ釈ふ更て止べきよも非更考不の及むむのぎり試ふハ云べし。其中ふ正しく當れるも。稀ふは有ば支れア。故今も。如此ふもや有むと思ひ依れるこゞを云ばし。と言れふるは実然語ふり。故已も此説ふ依て。考の及ぶ限を試ふ云ふア。○天地は阿米都知の漢字ふア。天とは。おれ

蒼くとあて。上下四方都て圓形ふ。圍成せるゞ如く見ゆ
る處の疆界を。阿米と云ふ。唯は大虛空の事とのみ思ハむも違ヲり。此も末ふ委く說明安を見て知るべし。はと神世よ已。天日球も阿米と云ヲ已。此は
即天日をいふ。あわ天と。天日と。虛空との差別も。次ふ注ふを見るべし。地をは。此大
地を云ふ。万葉十一ふ。大土採雖盡云くと有も。國土を凡
て。大土を云已と聞えて古言ふ已。ちて都知とは。師云。も
を泥土も堅はゆて。國土を成れ法を已云る名ふる故ふ。
小くも大ふも言已。小くは。ゑゞ一撮の土をも云ひ。まと
廣く海ふ對へ多陸地をも云を。天ふ對ヲて天地と云を
知は。れわ大知ふして海を母包と已。姓氏錄ヲ。海神の子孫の氏くをも。地祇

部ふ收られとる。是地ヲ。ちて正しく阿米都知と云言れ。
も。海をも包多法故ふり。はと五ヲ。阿米幣由迦婆。
物ふ見えと法も。万葉二十ふ。防人歌ふ。阿米都之乃。以都
例乃可美乎云く。はと阿米都之乃。可美爾奴佐於支云く。
岡部翁云。古、東人も。ちかしらふる心を添ゑて言傳へと
る言のまゝふ。うち云ヲ。免れだ。京の人ちりも。却りて古言
れ據とれべき物ぞと云まき。都
知を東言ふ。都之とも云るふり。
奈何麻爾麻爾。都智奈良婆。大王伊麻周。ふどわ已。今云。ふ
久尓といひ。阿米都知といふ差を。具ふ
論れと已。古事記傳ヲ就て見るべし。○未生之時も。伊
麻陀那良邪理斯登伎と訓法し。口訣ヲ。伊万太者。將來之
言不今也。といヲり。ふり
るべ
し。上ヲ注ヲる天日。はと大地も。未生ぢ已し時と云れ
已。○高天原は。名義師說ふ。高とも是も天を云稱ふて。ゑ

多ふ高知意ふ云へるとは。少う異ふ申。然れど此高日比枕詞了高光と云も。天照や同意。高御座も。天の御座と云さとふて。是等比高も同じ。又高行や隼別ふどは。高津宮段の哥ふ有虛空を高と云ふるふ申。此も高く行と云ふ比非ず。抑天と虛空とも有れども。共了上方ふ在れど。此国土より天比は。天をそらと。毎虛空を天とも通ひし云も常ふて。天比そられども云、申。さきバ高や云も。天と虛空とを通ひしふる名ふり。共ふ高き方ふあきぢあり。今世ふも。天比虛空を然言ふと申。物の虛空ふ高く上るを。高天下ふ何ま称く云こやをふ比非ざ体う知らば。此伊勢国ふどふて比。を申〳〵然云多聞くふり。古言の比ふきるれるばし。今云。東国ふても云ことふり。原とは。廣く平ら比る處を云ふ。海原。野原。河原。葦原比どの如し。万葉歌ふ比。国原ともふ申。か

かきば。天をも天原とは云ふ申。之原と云例も。海之原ふど。其ふう母あり。ちて其ふ。高てふ言找添て。高天原とは。此国土ふ申云ふや比申。凡て天を高とも云比。高きを以云称ふれば比申。云〳〵や有申。此説の如し。但此師説比。凡て高天原と云は。天比御国を云ことふる由。委く論ひ定ふ。う比其名義をも解きさるふるゞ。ふ〳〵は天日いまゞ成らざる時ふれど。其説合ざ体処あり。ちきど其全説比。第廿九段。天照大御神ふ。高天原を依し給ふとある処了引べし。故ふ〳〵ふは。只そちてふ〳〵は。天日い比名義ふ係る事をのみ引さるふり。

ほゞ成らぢる時ふるふ。高天原と云比いのふと云ふ。是も師説ふ。此三柱神さちは。天地ふ申も先立て成坐比ば。ゑゞ虛空中ふぞ成坐々むを。於高天原とふも云る比。後ふ天地成ては。其成坐申し處。高天原ふふ申て。後まで

其高天原ハ坐まに神あるゞ故あり。元來高天原ありて、其処より成坐ると云ふも非なり。然れど此説を信ずとしぢるはまた此ハ高天原とゐるを。後ハ天ハ御国の生れる處を云ふは有ばうらば。必ず〳〵は大虚の上方。謂ゆる北極の上空。紫微垣の内を云ふべし。其を如何とあれど。後ハ成れるを以て。其無き以前ハ及ばして云ふもの。れきよを云ふら祢ど此を決定て然るばうらんず。此紫微宮の邊をも。高處の極ハて。天の眞區さる處あれど。此ぞ高天原と云ばゝ處あきばあり。殊ハ最初の三柱、大神ハ天ハ日の処ハを坐まさば。北辰の内あるばき事。次ノ云を合せ考ふて悟ばし。扨さ如ハ古史成文を撰ばる時ハ。此處を於

天御虚空と書さ法を。中くよ惡かり如。故古事記ハ依て。今此如く記し改免ば。其を天之御中主、神の御在所ハ。次ハ云如く。北辰此内と聞ゆるを。其北辰をばうハ見ゆれず。あゞ天御虚空ぞ。ぞろ。此と指て云処あきゞ如くあきゞれ。○有神焉は。神代紀、一書ハ。天地混成之時始有神人焉。まさ次有神聖土煮尊次有神大戸之道尊あどある。有神てふ語を採て記せり。加微麻斯伎と訓ばし。ちて此神を。何處ハ坐を云はむハ。此を謂ゆ法北辰星を中ハ御坐せ。此北辰ちふ星は。天地ちうも先立て在、々むあと。漢籍どもハ依りて。已詳ら考得さる説あり。されど此ら云てを。煩はあ。故ら記さ。其を赤縣太古傳の。上皇太一紀を云を見て知るべし。まさ此ら依て按ふ。高天原と云は。直ちハ北辰の中を云ふも有むゝ。猶第廿九段の傳ら云を合せ考ふべし。ちて此を。御中主、大神ハ坐、古を。中ハまでも無き事あ法ゞ。何時よ成坐と云こ

ぜ。傳へおけまで知らうら爻。天地よりも先おれば。唯始
心得ぢし。是よりも以前ふ。神も在り事ありれば。其始を知
て傳ふべき由れき理。あり。北辰の始をも。准ずて悟べし。
然るを前ふも。古事記ふ成神と。ゐるを以て。成坐神
と文ゐるは。後ふ熟く思へば。惡かりし故ふ改め。ゐて
凡て迦微と云物のおとは。まゐ師說ふ。古へ此御典等ふ見
えある。天地此諸此神さちを始め。其を祀る社ふ坐
し御靈をも申し。はさ人も更ふも云爻。鳥獸木草此多く
ひ。海山おぜ。其餘何ふまれ。尋常れらば。優さる德のゐも
て。可畏物を迦微と云れも。優さるとは。今きこと。善
優さるれみを云ふ非爻。惡きもの。奇しき物
おども。世ふ卓きて可畏きをば。神と云おり。ゐて人此中
此神は。まゐ挂はくも畏物天皇は。御く世くみお神ふ坐

おを申しも更おも。其は遠ゐ神とも申して。凡人とは遙
ふ遠く。尊く。可畏く坐まし故おも。かくゐ次くふも。神
ることおり。はさ天下ふ。うけゐりてこそ有ら。祢。一國一
里一家の内ふゐきても。分くふ神おる人あるぞうし。
はさ虎をも狼戎も神と云。依こと。書紀万葉おどふ見え。
まゐ桃子ふ。意富加牟都美命と云名を賜ひ。御頸玉を。御
倉板擧神と申せし類。まさ磐根木株艸葉のぞく言語し
類おども皆神おも。はさ海山れどを神と云。ゐおとも多
し。其も其。御靈の神を云ふ非爻。直ふ其海をも山ふ
もちして云り。此等もいと可畏き物おるゐ故おり。抑
迦微も。如此く種くふて。貴ゐも。ゐも。賤きも。ゐも。強きも
有も弱ゐも。ゐも。善きも。ゐも。惡きも有りて。心も行も。其

様くふ隨ひて。ゞ正ゞくふし有れど。貴き賤きふも段くく多くして。最賤き神の中よれ。徳ゑくれくて。凡人うも負るさ子あ正。彼狐あど。怪きゑざを為ゑとは。いゝふ賢く巧ある人も。うけて及ぶべきう非ゑ。実は神あまども。常ふ狗れどふゑら制せらゆゝばう正の。微き獣あるをや。されゞ然る類のいと賤し。ゑ神れう子をれみ見て。いゝある神という子ども。理を以て向ふうれ。可畏き志と無しと思ふれ。高き卑ゑ威力のいとく差あること。ゑ辨子ばる非説ふ正。大かゑ一れきふ定ゑては。論ごのゑ物ふれれ有々ゆ。然るを世人の當然き理と云こゞを以て。神れう子を議るれ。太どきゑ非ゑとあり。惡く邪ある神れ。何事も理ふ達へるゑゑ正ざれみ多く。まゝ善神れらむから。其ゑどふ從ひては。正ゑき理のゆゝうのみもえあ及ぬ事も有ばく。事ふふれて怒正坐る時ふどは。荒び給ふ事ゆり。惡ゞ神も悅むゝ心ふごみて。物幸れふることと。絶て無きふしも非ざゆべし。まゝ人れえ知ら祢ども。其所為のさゝ當りては惡しゞを思れゆゝ事も。実ふれ吉く。善しと思れゆゝ事も。実ふは凶き理のあるふども有べし。凡て人れ智れ限り有りて。

はことの理れ。えゑら幽物ふれゞ。かふかくふ神れう子ハ。漫ふ測り論ふべき物うゆらば。はして善ゑ。ゑも惡きも。いと尊く卓ゝ当る神ゑちの御う子ふ至正て。は。ゑゞ母く〳〵妙ふ靈く奇ゑく。れむ坐はせゞ。更ふ人の小ゑ智以て。其理ふど千重れ一重も。測正知らるゆきれゞゆふ非ゑ。ゑゞ其尊ゑを尊み。可畏ゑを畏みてゞ有べゑ。今云。荒木田久老の万葉を注せるふ。此師説ふ據て。迦微とれ。畏み恐ゆゝ。意ふて。万葉ふ。大王の御命うしゑゝと多く見えゝるは。御国の古意うて。心れそゑひ。天皇を畏み奉るは。綾ふ奇ゑき御稜威のゑれし坐ゞ故ふ正。千早振神ちふ發語も。ゑゞ神霊れ意うれゞけゝるうは非で。神れかしゑむ意ふれゞけゝゝと云るれ。理ゑきて聞ゆれと。カミはカレコミれ畧語ふれ非ゑ。ちて迦微ふ。神字を當ゝゆよく當れ正。但し迦微と云は體言ふれ。直て其物を指て云のみ

ふたて。其事其德などを指して云ことゝは無きを。漢國ふて。神とは。物をちして云はみならば其事其德などを指るも云て。體ふも用ひとゝ。あとゝは彼國書ふ神道ゝ云るは測ぞとく雲しき道と云ことゝて。其道のさまを指て。神とも云て。道の外ふ神ゝ云物あるふも非ず。然るを皇國ゝて。迦微之道ゝ云ゝ。神の始給ひ行とゝふ道と云こゝゝふこそなれ。其道のさまを。迦微と云ことゝふ。もし迦微れる道といはゞ。漢國も意の如くれるばれど。其もふ直ゝ其道をさして云ゝこそふれ。其さはを云ゝいれらば。書紀ゝ神劔。神亀ふどなる神字も。漢文の意ふ。其德ちして云ゝるゝて。なやふき劔。あやしき亀と云ことふれむ。迦微とは訓べからば。もしカミタチ。カミガメれぞ訓ときも。多くゝ劔をちし亀をさして。迦微と名くるふふるゝ。凡て皇國言も意と。漢字の義と。全くは合がふ。多かふを。傍ふ合ぢる處あふるも。大方も合ふを取て

當さる物ふれむ。そも合ざふ所のなるふと。ちく心得分ばきふゝ。まゝ漢籍ふ陰陽不測之謂神ゝ有は氣之伸者爲神屈者爲鬼ふど云る類を以て。迦微を思ふばらゝ。ゝ有ゆ。ふの師説いと委も考へふは有きど。此も迦微てふ物既ふ有て。其後の德用を説示さきふるふて。其名義。まふふの稱へ初ふふ所以なむ。何ゝも記されゝ。既師説ふ。迦微と申も名義も。未思得ゝ。舊く説るふとゝも皆當らば。ゝ云れさり。彼カミは。鏡の中畧ふど云ふ類も。いふよも足らゝ。此も千言万語の有ゞ中ふも。最第一ふ辨へ知らば。も有ばらざる事ふる故ふ。今此ふ説辨ゝむとも。其はふ神と云ふ言義も。御紀の巻首ふ。古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙云ゝと有る牙ふれふゝ。

但し此を古く。阿斯加備とも訓さる由あれど。其も誤あ
ア。葦牙とハ固より異あア。まさ伎邪志と訓さるは。允當
ら。さて加備の加は。彼の意ふて。物を其を指て云ふこを。
備を靈妙ある物を云語あア。前ふも牙萌の約まア為る
あらむと思ア。りしゐど。然
ふハ非ず。かくて加備を。加微と同く。加夫を也加牟とも通ア
ア。其も神祖を。加夫呂とも。加牟呂とも。賀味留岐。賀味留
弥とも云ふて知べし。まさ酒を。カミ。カム。カモスあど
云は。全く同言同義ふて。物を烝成ず意ゐり。然れむまさ
ク三。クム。クヒとも通ひて。君も同言あらむゐ。約アてハ
キとも云ひて。物を組凝ず意毋ゐもれア。まさ道奥の末。
蝦夷ゐさりの国ふてを。今も神まさ国司を。カムイ。或も
カモエを云とぞ。此はカミを云とぞ。此はカミを云とぞ。
ミてふ言ハ延さるあア。頭大く下細き形を云ひて。頭槌
之劔。鏑矢あを也加夫も。本を同言あふゐ。株蕪冠被み
リルは助辞ふ。ゐ同じく。ラ
ハ活用あり。凡てゐ也加微てふ言の活用ハ。多く限りあ

ア也ことを。是ふ勝る詞あく。自ゐ。ゐら神の御功徳ハ。廣く大
あふふも叶ひて。いを〳〵靈異く奇妙ある事ふこを。
次くゐ云を合せ考べし。扨ゐは。三柱大神ハ産靈ふ因て。始ゐて大空
ふ生出給ふる。一物の中ふ含まアて奇靈ある物の極あ
ふゐ。終ふ清易ゐふ然騰アて。天御国と成ア。天御柱とも
成ある事ハ。下ふ委く云ふゐ如し。第二段の傳見るべし。斯てゐハ
加備てふ物の形状を考ぬるふ。決ゐて男易ハ形あるゐ
く所思ふア。上ふ云へる頭槌。劔。鏑矢ふどの形思合ゐべし。其も也ま也菌の類も。
即加備あるゐ。此も草木ハ精氣の。地氣ふ和合ひて生ふ
物あるふ。自然ふ同形あふもいを奇し。まさ凡て物ふ曚の出さるも。いと

細毛の生さる如くあるゞ。謂ゆる顯微鏡もて見る時は、そは細毛は如き物。悉ふ易莖形を具せるを以ゆ悟るべし。○図了云。示字は。神字の本義と所思ゆるゞ。此字篆書よ。示まと図とも書るを思ふ了。古き若くは加備のもえ上り。天と成き形狀よ象れる字ふは非じゝ。但し此を神字の本義と思ふ由は。神事ふ属さる字の。盈く示よ从ふを以て知ばし。又此字注了。神事也とも云ひ。天無象。ち見吉凶所以示人也とも云へるは。移りさる云狀ふゞ。

て天神の賜牙る天瓊戈は。彼牙ふ因ゞて生ゆ。其有狀も牙れせ物ふ。ふを漢土の古ゝハ。玄牡と称へることは。赤縣太古傳ふ委く云を見べし。

即神ふるふと論ふく。はさ御年神の男莖形を作ゞて。祭らふ免給牙ふも。神の形代ふるばく思は。又皇産靈大神の御靈代ふは。必此形を作ゆて祭ゞさゆし事と思は。其は印度ふて。古く大梵自在天王と称せるは。我ゞ皇産靈大神の事と聞ゆるゞ。其靈代は。男易女会ゞ石形ふゞ。彼国ふ云ひ傳牙さるをも思ひ合ゆべし。抑かの一物ふ含はゞし加備は。物の成形始ふ。其は。有るは。其混沌さる大凡を云牙るふて。其中ふ含まゞし物は。其形狀さふゝふゞけは故ふ。別多加備とハ称ひふらは。ふゝるふ此を含免る物は。大凡女会の形ふりしも。聚と名ふけ難き相れる故了。ふゞ大らゝふ一物と云ひ。それ交合の狀ふりしをバ。言ひ難しとぞ傳牙ふりゝる。其物ふ比ふ拔出て萌騰ゞ。天津日と成ゞ。天比御柱とも成て。宇麻志阿志訶備比古遲神。天之底立神も。其ふ因ゞて生成坐て。いとも〳〵奇靈ふる物ふるゞ。其物實ハ牙れゞし故ふ。天日を直ふ加備とも云ひゝは。かき御紀ふ。生一物。狀如葦牙。便化為神。云くゞハ云傳牙さゞゝは。但し此は混らハしき傳ふはあれど。神とは天日殘云へりと見れば達は免。まと諸越ふても。古は神ゞ天と相通牙るを思合ゆべし。ふのこと委く次段ふ云べし。

然れど加備とは。世ふ生出さる物の元始ゐて。いと〳〵
奇靈ある物ゐるこの。是よりて延て。都て奇靈ある物を云ふ
稱とも爲れる事を辨へ曉るべし。或人問。加備を形成せ
心得べ。さるも此よりて以前ふ。三柱の天神おはし坐し。其
る始めゐと云ふと
御名をも称ず申せる上も。御身体あるふと論ふし。然れ
も牙字始とは云ばらず。此理も如何。答。然らば。さるは
三柱天神の。御身体あるハ論ひあれど。此も始ふく坐
ましおれど。誰ら其始を知らむ。斯て彼一物は。三柱神の
始めて生出給ずて。即その成立をも。直ちふ看
行し給ひおく。其趣を語り継し。然れ給へるれるべし。然れ
ど三柱の御名ともふ。御みおら御名告給ずるハ有。
まじくもるらふ後の神世をて。謂ある造化の首さる御
功徳を称へて。賞せ奉りて。さる御名ふと論ふく所思
るふり。然れど。三柱神の御名も。まと神を称へ申せ
ふことも。共ず成りしをゆ後ある事を悟るばし。
加備と加微も同言ふて。其いと奇靈ふく妙ふ事を稱

よりて及びて。造化の事ふ與て給ふ加微等ハ申ハも更ふ
り。凡て世ふ奇ふく靈し功徳あふ者を加微と云ひ其
をやゞて神と書て。神も加微と云ふ當る漢字ある
ふと。前ふ師説を引ふゞ如し。又
後ふは。凡人も中ふも卓絶る人を加微と稱ひ。是を
守。長官ふど。皆カミを云も。尊みて云ふ。まさ頂上を
カミを云も同意ふり。まさ髮をカミを云も。頭上ふ生る
をり云れるべし。岡部翁云。後世人も。神と上とを分て用
ふるゝら。文字ふれみ目ふれて。言の意を忘れて。字ふ於
きて別ふゆとのみ思ひ。附會れ理窟を以て解むとハふ
も怯ふし。皇朝ふも一言を轉して。ゐまさの事ふ云ふり。
一言を一事と云
るも漢風ふて。
万物の中ふも。卓越る物をば。宏く稱
て。神と云ふ事とぞ成れて。此ふ云る言ども。神
捻ての神も德用の事も。上り委く師説
を引て記せれど。立返り見て知ばし。

○御名者。ま於名

と云言は意は生成熟おどは本語ふて。形也おども活用同義れと。きては那流那良年とも云れるゞ。神まさ人は更おと万物をも某と號くる事は其物かおらゞ成就さる上ふて。負ゞ依おとをおと神まさ人物ふ限らを方の中ふも人は事業の上もこきは同じ。其行狀は善惡功德は大小ふ依て自然ふ他よと稱へ云とおろ卽名おゆ。其は景行天皇の大御語は。大倭國者以行事負名國也。おハ年中行事祕抄を始め其外の書ふも見えて最も賢き大御語ふぞ有れる。と宣給ふるを以ず知る法し。ふれ次くふ神さちは御名義を解く処くは云を合せ考へて辨ふべし。○天之御中主神御名義天は阿米と訓法し。阿米ゞは蒼くとおて。上方よと始免て四方ふ廣く遠く見遙

うさ法く疆界を云ふ。此こと既は上ふ注と。まさ天日を事あり。はさ已さはふ。雲の眞柱を著せる頃は未委く思得ざと し故は。其說盡さを。かき今詳うふ辨ふべし。さて此疆界ある其内を與と云ふ。竹の節と節との間を。卽世間とも云ふ。漢籍ふ宇宙と云はおれあり。されず天皇命の御世知し食を事を漢風うは御宇と申は。おの世と云ひ世間と云ふは多くい人ふ屬て称ふ言あり。ちるは君ゞ世人の世我ゞ世ふど云ゞ如し。扨まさ凡て障る物れく廣く遠く疆界も何も無き處を虛空と云ふ。まさ此與の中も。いを廣く遠く大ふして限と無ゞ如く唯空く見ゆる故ふこきをも曾良と云ふ。此の如く。阿米と曾良と與と各く異ある事ふは有れを。其差別のささうふ見分ち難きゞ故う。又相通ハして。阿麻都曾良とも云と。かくて其蒼くと見ゆるは。何故と云ふ。此をかれ

三柱の大神は。天地及び万物を主宰給ふ。其御氣勢の。普く虚空に充満るが。青くは見ゆるなるべし。（ふれども。其氣厚く充ち重なる故に。色濃く見ゆるなり。）扨古の大虚は外方に涯なしと。何を以て知ると云ふ。此を見極むるに能はざりきども。下に。第六十五段。神速須佐之男命は。天壁立極巡坐而。云々と有るを考合せて云へる如し。（猶次に云を見よ。）抑阿米てふ名義は。網に。阿美。阿麻。阿年。阿麻年とも活用く言なり。（此は別に著せる古史本辞経と云書に委く記せれば。こゝに大略を云ふ。）今見放るところ。斯の如く。四方に向伏し。廣く遠く壁立さ様に見えて。（漢籍に天圓如倚蓋と云ひ。まと為蓋象天とも云ひ。はさ字書に。冂は莫狄切音覓。覆也。从一。下垂也とも見ゆ。）此頂上の處を。北辰に。方に下垂さ様。下は方に。大地に障りて見えぬ。（其は大地は休息なく旋回る物なるに。何方に向ても。其端を見る事なき故なり。）然れば。上下左右なく如く。然らば。北辰の處は上にて。左は東。右は西なり。（此北辰の処。天は本域にて。去れば世界は大網なり。されば諸越籍に。天網恢々疎而不失とも。天網雖疎終不漏也。なども云へり。さて阿米は。上下四方に圍繞て。圓形なる時は。いかくと指なれば。名くばきやうなれば如くなれども。主とは其本網とする処を云べし。云まくも更なり。）扨て此阿米てふ物は。何時成さるべきと云ふ。傳へ聞きは知らざれども。更に。ぬきど強て按ずるに。其本網さ様處は。北辰と共に生れむ。總て。一物の生出る頃は。

成整へる物なるなし。此れ譬へば彼牙れ萌騰れるが火の然るが如く阿米の成きるが其烟の普く四方に充ちされるが如くなや有々む。御中は師云。眞中と云むが如し。凡て眞と御とは本通ふ辭なるを。やゝ後ふは分て御を尊む方。御字を書も此意れ也。但し此字れ漢国より也は王のうなふ限りて云ふ。此方ふて美と云は天皇の御うなふ限らば凡人ふも何なも云辭あり。眞れ美稱ると甚しく云と。全れ古やゝふ用ふされど古れ言の遺れる。れを通はして眞熊野とも三熊野とも云る類多く。また眞と云ばきを御路ふど多々也。御中も此類ふ也。天れみならば国之御中里之御中ふぞも。万葉歌ふにゆ。俗言ふ。ン中といふも眞中ふて。ンと撥ふまさ。ツ、とはむるれ。俗言の常ふ也。はと毛那加を云ふも眞中の

轉れるふて。天武紀ふ。天中央と云也。此字を以て此れ御中れ意をも知べし。主は大人と同言なて。能宇斯れ切はきるふ也。宇斯を主人と書るふとも見えさゆ。書紀ふ継躰天皇の大御父彦主人王まさ続日本紀ふ阿倍朝臣御主人ふど是ふり。ふれら今ハ訓を誤れ也。故古ふ宇斯れ。必某之宇斯と。之を加ふるふ云ひ。奴斯れ某主と直ふ連ふて。之を加ふ煞ふ云也。飽咋之宇斯能神。大背飯之三熊之大人。大国主神。大物主神。事代主神。經津主神ふどれ如し。また書紀ふ齋主神号齋之大人と見え。はと丹波美知能宇斯王を。書紀ふは。道主王とふる。是等を以て知るし。奴斯ふも之を添て某之主といふ。又ふ主とばふ也。首ふ云ふさは。みれ後のふとふり。万葉十八。天平勝宝元年の哥ふ。ふ奴之とふ也。其頃を也ぞ。さる言も云也れむ。まさ主字を宇斯ふあて密して。奴斯ふ當さる

む。能宇斯と云をりも。約免て奴斯と云し言の。古へをゞ多
かゞし故あるべし。されど本を正して云はゞ。主字ばゝ
めむ。宇斯を訓べ。ちて宇斯波久と云も。其處れ主として。
きあとゞゞあり。
領居るあとゞゞ。今云。宇斯波久の事む。第百十五段の傳ふ云べし。ちきば此神ハ。
天眞中ふ坐くて。世中れ宇斯さる神。と申ゞ意の御名ふ
るぢし。或む此神を。人臣の祖ありゞ云ひ。或ハ国常立尊
ゞれ配合ふて。皇后ふゞと云ひ。国常立尊の別名ふ
ゞれど云む。心ふまゝせさる妄説ふめ。大方近きふ
ろハ。かゝ。依邪説いと多し。ゆ免惑むさるゝ事勿れ。と有
ゞ。實ふ此師説の如し。かくて此大神の御在所む。何處ぞ
と云ゝ。ふゞ天れ眞中ふ坐くて。とれみ云はれさるむい
のゞ。さるハ何もふき大虚空ゝ坐ませる趣ふて。
餘りふふど〳〵たく聞ゆれむふり。〇己。されふ雲の眞
柱を著せりし頃。む。今云ふ旨をば。思ひ得ゞゞし故ゝ。其
説拙ゝゞき。故。暇あらむ。訂正雲の眞柱。
と云を作らむとゞ。見む人これを宥せ。此は天の最中れ

いと高く。寂寞ふして動き徙らぢる處。安免はち謂ゆる
北辰ふて。されれ天れ本綱さる處ふ依ゞ。御中主大神む。此
處ふ鎮ゞ坐せるふめ。扨それよゞ。五百綱千綱を引延て。
編成せる如く。宇宙の万物を悉く主宰ゞ給ふ事と聞え
さり。万葉十九ふ。天尓波母。五百都綱波布。万代尓。国所知
尓刺。我大王者。蓋尓為有。と。年等。五百都〻奈波布。まさ三ふ。久堅乃天歸月乎綱
言ふも。如調八絃琴。所治賜天下天皇云〻と詔ひ。漢籍ふ。
天下を治むることを。經綸安と云へるふゞ。みふ此大神
の。宇宙を主宰り給ふより移し云ことふて。有ゆる物一
も洩ゞ〻ことと無しと知ぢし。上ふ
引る天網恢〻云〻。思ひ合安ぢし。然れむ此大神はしも。
無始よゞ坐はせば。最第一の神ふ坐安申ゞも更ふて。
国之常立神を。最初とゞる事れ非ふる由む。既ふ師の辨
へられさるゞ如く。まさ雲の眞柱ふも云るを見て知ぢ

し。また唐書。宋史などに。皇国の事を記せるに。初主。号天御中主とも有り。其御功徳は廣く大きなるこゝ。稱ふ申さゞき詞もれしと知べし。阿那かたは。阿那多布登。れは諸越に傳へたる。此大神の古説は。赤縣大古傳の。上皇太一紀と云ふを見て知るべし。○次。師云。都藝は。都具といふ用語の。體語にれきるれ。凡て言ふ躰用の別あり。躰とは動うゆを云。用とは活くを云。その躰語は。本ゝ躰なると。用の躰に成れるとなり。いと上代ゝは。用語多くて。躰語さくなりをし。世くゝ人の言語の多くなりもゆくまゝは。用語の分きて。躰語にもれるゝいと多なれ。都具は。都豆久とも。同言なれば。都藝も都豆伎と云ふ同じ。今云。次続なども。ギグと濁きとも。本は清音にて。付ゝ同言なり。其は次は。彼は此の如く意。続は彼と此と如く意あるをもて辨ふべし。ちて其は縦横の別あり。縦は。假令ば。父は後を子は嗣さぐひなり。横は兄は次

ふ。弟の生ふ〳〵類なり。是ゝ下ふ。次とのるは。皆ゝの横は意なり。されば今此ゝを始めて。下ふ。次。妹伊邪那美。神とある次まで。皆同時ふして。指續き次第は成坐ふゝ。兄弟の次序は如し。父子の次第の如く。前神の御世過て。次は後神とゝ。くふは非ず。思ひまがふることなき。○高皇産靈神。本ふ。皇産靈此云美武須毘と。なり。古語拾遺は。古語多賀美武須比。新撰姓氏録は。高弥年須比命などある。是訓の證なり。れは此神の御名を。書等は。高御産巣日神。高御魂命。高魂命なども書さり。皆御紀の訓注。古語拾遺などは依て訓べし。タカンスビ。など唱ふるは。音便ふ頽れさる。後世の訛なり。御名。義高は高天原は高と同く。御功徳を稱へて申せるなるべし。別御名をも。高木神と申せり。姓氏録は。天高御魂乃命。三代実録は。天高結神などゝ。天てふ言を冠らせても申せり。此も美称れ。

皇ム御ゼ書ケルも同ク。美稱ホ已。產ム。正字ヨテ。宇牟須
と云言ハ。宇を省ケルホ已。仁德天皇の大御哥ホ子產を。古牟と詠せ給へり。新撰
字鏡ホ。祇。宇牟須比麻豆利とあり。此ム產靈祭ヨテ。牟須
の正語ハ。宇牟須ホル證ホ已。れホ此祭のホとム。今も生下ホ委く注べし。
を。宇牟須ゼい水国も多かり。出羽秋田ホどヨては。烝さへり。ウムスゼ云へり。夏
の頃甚く暑きを。今日ムいさくうむしてホど云ふ類ホり。師云。生は男子女子。ハと苔
ハ牟須れゼ云ふ牟須ふて。物の成出るを云。今云。万葉ヨ。草牟須ラば
祓。まさ草武佐受ホどもホ已。靈宇は。比と云ふをく當れ已。凡て物ハ靈
異れ体を比と云ふ。久志毘の毘も是ホ已。比古比賣ホどハ比も。靈
異ホる由の美稱ホめ。ハさ禍津日直毘れゼの毘母此意

ホ已。今云。牙ハ備も同ク。安れむち火ホるグ。火むラ已奇
し。ハ物ムホき故ラ。靈異ホる由の美称ラ。種ゝ用ひ
弘ハさりと所思也。其由ム第十一段ヨ已。第
十六段までの傳ヨ。次ゝ注を見て知べし。されど產靈
ゼは。凡て物を生成れホとハ。靈異ホる神靈を申レホ已。
さハヨ此毘字。神佐備蒸備ホどの備と同くて。夫流とも
活用きて。米久と云ふ似さり。されど牟須毘とは。生むゼ
レる狀を云ホり。ゼ思へめしは非ゼ。此外ふ。火產靈。稚產靈。津速產靈。興台
產靈。玉留產靈。生產靈。足產靈ホど申レ御名も已ホ已。牟須
毘の意皆同じ。日本紀竟宴哥ヨ。得国常立。尊。大江維時。あ
ちろ於よ万でうあえ。ゆ。ハのしさをちむるはじ。ハ牟須毗於幾弓。
此ム產靈を。国常立尊ヨ係て詠さるホ已。○高木神。高は。
上ふ同じ。師云。木は具比の切已さるて。卽產靈と申レ
と同意ホ已。其故ム。下ハ角機神。活機神。の機ム具美ゼ通

ひて。具牟とも活く言ふ。ぢきむ角機む。角具牟を同意ふ。葦牙ぞふ角ぞむと云も。角の形して。生初るを云ひ。まさふぢて。木草の生初るを芽ぐむと云ひ。涙の出初るを。涙ぐむといひて。具牟は。凡て物の初まり芽ぶを云。辭ふれば。產靈と同意ふ。とむ云ふ。

三代実録ふ。筑後国高樹神と云あり。此神ゥ。はさ地名あどよて別神ふるゥ。今云。清寧天皇巻ふ。高木角刺宮と云るむ地名れり。又此ホゥふ。高木比賣。高木郎女ふど云も見ゆ。地名ふるべし。

○蔓枕高皇產靈神。蔓枕ハ高の發語ふて。此む後ふかく稱へさる物ふるぢし。武烈天皇巻ふ。許母麻久良。多加波志須岐。神樂哥ふ。古毛万久良。太加世乃与止仁。ふどあり。岡部翁說ふ。いふし子蔣を以て。枕とせし事は。万葉七ふ。蔓枕。相巻之兒毛。在者社。十四ふ。麻乎其母能。於夜自麻久良波。和波麻可自夜毛。ふど詠るふて知ぢし。十四の哥む。眞小蔣ハ同じ枕む。吾は纏じ哉もの意れり。高と連くふ。ふとは。日本紀私記ふ。師說。古以蔣爲枕云。高之眼目故。欲言高之始有此言乎。と云ふり。ちらば床上ふ。枕む殊ふ高くれる物ふれば。事もれく高と云ゥや有ゥむ。漢籍楚辭九辯ふ。堯舜皆有舉任兮。故高枕而自適。とふる注ゥ。安卧垂拱。万国治也。といふ子ゆ。事ある時む。寢苫枕干。とて安ゥら煩を。世平ふれば。高床ふ安卧ふ。高枕ハ云。るふて。ふの於ゥら相似さる事ふり。はさ掃部寮式。大嘗宮神坐ハ料ふ。坂枕一枚。五尺五寸廣三尺。料編蔓一枚。生絲一兩と云り。或傳ふ。此神床の八重疊ハ下ふ。其蔓をゥいい敷て。高くれと云り。然れば枕ハ方高くて。床上斜ふれば。坂枕ぞ云ゥ。是ぞ上代の臥床

の狀なるぢなれど。薦枕高しと云も此意なるぢし。とは
ア。薦のことまさ此を枕とする由も。第九十一段の傳ふ。委く注ふべし。ちて神の御名ふも。
發語を冠ふとは眞髪振櫛稻田比賣。薦枕志都沼値命ふ
ど。猶多かア。こも薦枕して。靜ふ寢る由をもて云うけ
とり。ふわ第百四段の傳ふ注ふを見るぢし。○
神皇產靈神。御名も義まは神皇は加年美と訓べし。高皇
ぜ並びさる稱辭ふア。產靈の義上ふ同じ。此神の御名を。書等ふ。神產巢
日。神。神產日。神。神魂。命ふど書るは。カミムスビを訓み。神
御魂。命とも書さるも。此ぜ同く。カムミムスビと訓ぢし。
○神產巢日。御祖。命ハ。迦微年須毘能美於夜能命。と訓ぢ
し。大土之御祖。命。大山祇之御祖。神ふど。みふ之祖といふ例ふア。ちて御祖としも申ぜ
は。此神は女神ふて。諸の神等も本は御母の神ふ坐せば

ふア。母を於夜と云こと。まさ於夜ふ祖。字ふのける由も。第八十一段ふ注べし。○神魂大刀自。
神。神魂も。迦微年須毘ぜ訓來れるふ依ぢし。師說の如く。凡て古言ふ。
同言の二は重ふるをば。約めて一は云例ふまきむ。こまき
も神美と美の重れは故ふ。多く約めて申し習ふるふは
べし。大は稱辭。刀自も岡部翁の說も如く。允恭天皇紀ふ。戶
母此云覩自とアて。戶は家。自ハ主も義ふア。神祇官も
宮主を。美夜自と唱ふる類ふア。後の物語書ふ。いふ所の
云ふ。即。是ふり。ちて御紀ふ戶母と書は。古へ戶內の事を。母ふ
は人の。老も故るはで執はきむ。母ぞ家主ふる故ふア。教子
ふる。上總。国人大高秀明云く。我鄉あさりふも。今も家內
ふて。專と事執る婦人を。家主と云ふ。母あれむ母を云ひ。
母無れも妻を云ふと云ふり。古意の存れるふア。ちて此神は。女神ふて。產靈も內

事を掌給へば。大刀自神とも申しあり。あれ下より委くち云を見るばし。ち
て師説ふ。世間ふ有りとゐる事も。此天地を始めて。万ゝ物
類も事業も。悉く皆此の二柱ゝ産霊大御神の。産霊ふ資
て成出るものあり。いで其事の顕れて。物ゝ見えさる
跡を以て。一ゝ云はば。まゝ伊邪
那岐伊邪那美神ゝ。国土万物をも。神等をも生成給へる。
其初も。天神の詔命ゝ由れる。其天神と申奈も。此ろ見え
とる神ゝちおり。はゝ天照大御神の。天石屋ゝ刺隠坐し
時も。御孫命ゝ天降坐むとにるゝ依て。此国平ゝ成べき神
を遣に時も。其事を行ひ給ひ。まゝ此国を造固め給ひし。
少毘古那神も。此神の御子ろて。その国造固め給ふる事
も。やゞて産霊大御神ゝ命ふ依れり。大のゝ是らを以て。
世ゝ諸の物類も事業も成るはゝみあ此二柱神の産霊の
御徳あることを考へ知るばし。凡て世間ゝゐる事ゝ趣も。神代ふ有し
跡を以て考ゑ知べ支れゝ。古ゝゝ今ふ至ゝまで。世中ゝ

善悪き移ゝもて來し趣ふどを験むるふ。みあ神代の趣
ふ違へるゝとあし。今もくさゝ万代までも思ひもかゝ
ゝばし。今云。信ゝ此師説の如く。神世ゝ有し事の跡を。ち
知られざることは無き。いろれまで。世人ゝ。さる神世の
因縁をば。探ふむものとは思ひあらで。後世ふ作爲せる。
外国籍どもゝ依て。事物世間の理を。知むとも爲やら。
是ぞ信ゝかの木ゝ縁て。魚を求むる類ふるばく。まゝ喬
木を下りて。幽谷ふ。已ゞ心と没どとくも見あされて。最
も怯く。憐ゝ思むゝれど。妖神ぞもふ耳塞ゞれある人く
の心も。いとも便あく。まゝ此神の兒。千五百座ゐゝゝゝゝゝゝ
悲しき物ろぞ有なる。
ゐる千五百は。あゞ数の限ゝ。れく多ゝを云例あまぞ。有
も。ゐ神あちを。皆此神ゝ御子あゝと云。むも違はゝ。神も
人も。みあ此神の産霊ゝゝ生出きばあゝ。拾遺集歌ふ。君

見れむむにぶけ神ぞ恨怨し紀。故れ招き人を何造ㄷ々
むを詠るむ。其頃までは。外ゐ世人も古意をよく知きㄷ
しあり。狭衣物語ふ。いとかくしも造ㄷおき聞えさせ々
むを年にぶの神さへ恨怨しれ々れむと云るむ。拾遺
集の哥ふよりて云るゐㄷ。○今云。ゐゐ詞花集ふも。心さ
ずむにぶの神や造ㄷけむとくるゝしきも見え出君ろ
れ。長清集ふ。をけやら出人の心れ故ら紀をり。むを出ぶの
神を恨故るゝ。れ。ゐを詠るも。皆この拾遺集ふ本故々る
よて。産霊をむを出ゐと活らしさるれㄷ。三代実録ふ。高結
神と書れさるを思ふ結と云ふ語むもと此御名を
り出て。種しふ活用る物ゐるべし。信ふ物類む。けれむ世
悉くふの大神の。産び成給ふことゐきむゐめ。
ふ神はしも多ふ坐ども。此神む。殊ふ尊く坐くて。産霊に
御徳申に母更れをば。有ゞ中ふも仰ぎ奉るべく。崇紀奉
るぢき神ふゐむ有ゝ当。然るを書紀の初ふ此神をしも
挙られざるむ。甚く事足む出趣

ゐり。一書む一書ふて。本書とむ別ことふ法ふ。本書ふは。
末ろ至りて。ゆくゆくゐく出給ㄷるも。いろろぞや聞ゆ。此
神む。餘神の故らふ。然ゆくりれく挙奉るべき神ふむ坐
ふば。ゝれらば古事記の如く。初ふ挙奉りゐゝるぢき事
ゐりかし。又世くの物識人さちも。さゝ国常立神をのみ。
上れき神のごと言痛まで言挙て。此産霊神の御徳をだ。
ちしも論せざ法む。ゐゝ書紀をのみ據として。古事記ゐ
どををくも見更事情を深く考へざる失ゐり。上代をり
此神をこそ。朝廷ふも殊ふ崇祠ㄷ給へき。かの国常立神
む。殊ふ祭ㄷ給ひし事も聞え出。諸国の神社どもの中ふ
も。をさ〳〵見え給へるふとれきをや。○此師説ふ就て。篤胤猶考ふ法ふ。高
皇産霊神ハ。男神ふ坐くて。産霊の外事を掌坐し。神皇産
霊神む。女神ふ坐くて。産霊に内事を掌給ふゐ法。然る
を。記傳ふ。産霊大御神む二柱坐を。古事記の中ふ。其御事
を記せるふむ。二柱並出さまㄷる処むゐくして。或時む
高御産巣日神。或時む神産巣日御祖命と。ゝろあ〳〵一柱
のみ出給へる。其御名ハ異れども。唯同神のおと聞えさ

ア抑くゥく二柱はして。一柱の如く。一柱ゥと思ヲバ。二柱ふして。其差の髣髴しきも。いと深き所以あるおとうぞ有ぢき。と云きしハ委ゥらば。其事ハ顯れて。物ふ見えさぬ蹟を以て

二扨三扨云はゞ。天照大御神の。天石窟ふ幽居坐る時は。さ皇美麻命の天降坐むとする時。その御天降の時ふども。高皇産靈神事執給へり。是ら外事と云ぢき事どもれア。はさ大名持神の。燒石ふ燒著れて。死給ヲる時ふ。蚶貝比賣と。蛤貝比賣ヲを降して。活さし免給へぬまさ少毘古那神の海をア依來坐る時ふ。大名持神と兄弟とふア。て。国造固免よと詔命給ヲるれどは。内事ヲを云ぢき事どもれるを。神皇産靈神もれし給ひて。其御名の出さぬふ。

神産巣日御祖命とアのア。御祖命とハ。多く母を云例ふれむ。女神ふて内事ヲ掌賜ふとヲを疑ふし。神産巣日神とあるも。初發の処ヲ。今一所あるのみうて。餘ふも大ゥさ。神産巣日御祖命とアるを。大名持神を活し給へる処ゥれみ。御祖と云ざるも。大名持神も御祖命と。混はしゝれむふるべし。斯て高皇産靈神を。御祖と云へることの無ハさらふも云むば。命と云ることも。一所ざる有ふをふし。猶言はゞ。神名式ふ。出雲国出雲郡ふ。神魂意富刀自神社と云あア。ふれふ依て。上ふ此御名を挙さり。刀自とは。上ふ云如く。女おいふ稱ふれむ。此も一の證とすべし。此を神魂命の大刀自と云ふ櫛八玉神の禱白せる言ふ。神産巣日御祖命ハ天之新巣ハ凝烟乃。八拳垂まで燒擧ヲを。義ふ見むも非ふをぞ。るも。大刀自神ふて。御厨の内事ふ預ゥア給へむれア。此事

た。第百廿五段を見て知べし。けて此二柱は男女大神は。産靈の御德は間を。諸の物類も事業も生成。神あちも生坐るゝと此由は云はゞ。少毘古那神を。古事記ては神産巣日命の御子とゐる。御紀ふは。高皇産靈尊は兒とゐる。古語拾遺も同じ。大三輪神社記よも。古事記と同傳を載して。召久延彦問時答曰。此者高皇産靈尊之子。少彦名神故遣使白於天神。于時高皇産靈神聞之而云くといひて。是はゝ豐秋津より下は。御紀と同じさまの傳を記せり。

比賣命を。古事記まゝ御紀は正書ふ。高皇産靈神は子とゐるを。一書ふ。神皇産靈神の兒と云る傳あり。はゝ姓氏錄ふ。久米直高御魂命八世孫。味耳命之後也と云ひ。はゝ久米直神魂命八世孫。味日命之後也。とゐるをも思ふ法

ゝ。味耳。味日同人あり。師は耳日のうち。何れぞ一は誤写あるべし。と云れはまゝど。耳は日を二つ重ねさるゞ。轉れるよて。同語あるゝを。天忍穗耳命の処ては。云れさはゝ如くれるをや。此は諸の神あち。二柱の産靈は御閒ふ生坐るゞ故ては。かく二方ふ傳へさはれ。

本朝事始よ。加奈止美命と云を。高皇産靈与神皇産靈之子也。と云へる事もゐるハ。由ゐる傳あり。偖まゝ御紀ふ。高皇産靈神の御言ふ。吾所産兒。凡有千五百座と詔へ。と有ふ。出雲風土記よ。神魂命は御子と云ゞはは。多く見されども。高御魂命は御子と云るゝは。一柱ゞふ有ること。

のみ有て。高魂命の御名は。一所も見えゞ。凡て出雲風土記ては。神魂命といふ御名は。大名持命の宮造れとを。命せ給へる事も。御紀ては。高皇産靈尊とあるを。其は。ら風土記ては。神魂命の御量以といへり。其は彼記の傳くは。多く御子ふおきて云へればあり。此は神あち。二柱神は御

閒ふ生坐れど。神皇産靈命は。その御母ゟ當ㄊ坐ㄊるの故
ゟ。御子をば專と。此神ふ係て。語ㄊ傳へさ法故ぞかし。されど姓
氏錄をはじめ。書等ゟ。或ハ高御魂命の後といひ。或は神
魂命の後と云へるふ拘むならば。多く皇産靈神の御末と。隔て
ふく心得て有べき物ぞ。まさ或た。天御中主神ㄊ御末ゟ
云へるおとも彼此あるハ。猶その本祖を云るふて。其ㄊさ
産靈神ふ係ㄊ法ざ法ㄊ無れど。是まさ拘ㄊ法べき事ふ而
らば。凡て是らの事どもを。熟辨へざらむゟは。物の出自
ゟいぶゟおき事
ㄊみ多からまし。其は實ふ養育ㄊ給ふ事ㄊどは。此神ㄊ
御業ふㄊ坐しおと。後ゟ而ふ多し御母神さちの。御子を育し
立給へ法趣ふ。思合せて曉るべし。後の餘母神さちㄊ。御子を育し給へる趣ㄊ。
大名牟遲神の御母。刺圍若比賣。味鉏高彦根命の御母。多
紀理毘賣命。佐太大神の御母。支佐貝比賣命。春山之霞壯
夫の御祖ㄊ。其子を見立さ
る事ふどを。考へ見法し。
偖まさ高皇産靈神ㄊ。表ゟ立

坐て。外事を掌さ乃ひ。神皇産靈命は裡ふ立坐て。内事を
掌さ乃ふ趣ふ法ふ據て思ㄔば。貞觀儀式立皇后儀ㄊ宣
詞ふ。食國天下政波。獨知倍伎物爾波不有。必母斯理倍乃
政有倍之。とて皇后を定ㄊて。閨中ㄊ政を成給ふこと。古、
をㄊ行ひ來ㄊ法事ㄊをし見えさる。其本は産靈大御神
のふし始ㄊ。傳へ坐る道ふㄊ有ㄊ法。されどそ。伊邪那岐命ふ。伊邪那
美命偶まして大事成ㄊ。大國主神ゟ。須世理毘賣命偶まして。大造之績ゟふし給へり。まさ天忍穗耳命ゟ。豐秋津
比賣命の女。瓊依毘賣命偶ひて。迩く藝命生坐るをり次
次ゟ。其御嫡后をば。いと重き物ゟ撰び給へり。其ㄊ神武
天皇巻ゟ委く注ふを見べし。まさ是をㄊ及て。凡人の上
を思ふゟ。夫ㄊ外事を掌り。婦ㄊ内事をいそしみて。兒を
育ㄊを始ㄊ。家内の事ども專と行ひて。戸主とさ乃称ふ
こと。此謂ゟ因ㄊこをあれど。上件のふゟもを思ひ遍

たて。此意ゑ考ふ可し。ちて皇産靈大神は。諸神を生給ふ法るまじ。如物ふ。

た。唯その男女は産靈の。互ふ芽し合ふ。妙ふ奇ぢき御德の間より。産成給へるうて。夫婦の道ふ資とふは非ず。

夫婦の道は。伊邪那岐。伊邪那美命よりぞ始まりぬる。是ぞ産靈は大御德よりも有々法。夫婦は道ふ由らでは。子を生得ざる。凡人の上より疑ひ思はむは。産靈の德を知ざるもはぞ。神等のみふらば。諸の物類は更ふ。天地はさ考ふ鎔造さるへ法産靈は趣も。是ふ準へて想像奉るぢく。天地を鎔造給へる事は。次段うて知られさゆ。まさ生とし生法物ども。人は更よも云ば。其神魂性情靈智も。悉く産靈神の賦物ふる由を母辨ふ法し。

漢土の古説ふ。天ふ主宰さる神ありて。謂ゆ法造化の原を司り。物類も事業も。悉く其神靈ふ資て成り。人は生質

ふ。至善はしき靈性あるふとも。其神の賦る由を云へるは。此大神の古傳の遺れるふ。ちて新撰字鏡ふ。祇以䐑祀司命也。宇年須比麻豆利とふ。漢籍説文ふ。祇以豚祀司命と見えさゆ。此文ふ採れるふ法べし。以䐑祀と云るは。諸越ふて祭る趣ふれぞ。此間ふも其祭法を用ふ。用ひざ。其は知ら祢ど母。但し牛を殺して。漢神を祭れるさゆ。も有れぞ。漢風の祭ふ。其仍ふ用ふ。むも知ぢらば。司命神を。産巣日神ふ當て。其祭を爲ふるふとは疑ふし。されど餘書ふ。此祭祀のふ。未見當らぢ。ちて司命神の事は。抱朴子を始め諸越の古書ふ。上帝を云へし見え。其説ふ。人隱惡あれぞ。天れる司命神。そは。犯せる罪の輕重ふ随ひ。大ふるは三百日の壽を奪ひ。小ふ法は三日は壽を奪ふ。れ本異説も多ふれど。此は漢土の古説ふて。中ふは信ら事ども。ある故ふ。已別ふ委く論ひ記せる物ふ。法と

上帝は天帝也。ともあひて。御紀ふも。早く天皇祖神ふ當られ給まぼ。由を〳〵麁略ふ思ひ奉るぼきよ非ず。桓武天皇紀よれ。皇天上帝とも。天帝とも見え。文德天皇紀よれ。昊天とあり。此れら皇典どもよ數見え。古語拾遺ふも。皇天ぞも。皇天二祖とも申せり。其餘古書ふ出さるれ。計ふるふ遑あらぼ。斯て司命神のよぞ。猶熟考るよ。宇年須比麻豆利と有ふ依て。一ヒ多ひは皇產靈大神とも聞ゆまど。此れ伊邪那岐大神ふれ非ざ法ろ。皇產靈大神と。伊邪那岐大神との事れ。互ふ混れさるよぞ少からぼ。然るれ。上帝まと天帝とも稱ひれ。伊邪那岐大神あるべく聞え。司命と云よぞ母。彼大神の。一日ふ千五百產屋立てむと。詔給ふる趣ふ思合され。後ふ神祇官ふ齋き祀ひ給ふ。八神の中れる。玉積產日。生產日。足產日。三神れ。必司命の神あらむと所思れむれひ。此れ猶皇典ハ更ふり。其れら古書をも。普く考へて。神武天皇卷の傳ら注ぞぼし。又大祓詞の末ふる。文部ゴ祓刀を上る詞中ふ。皇天上帝。司命ふ。どのよと有て。祝詞考ふ注されさひ。合せ見べし。○神魯岐命。神魯美命。よを此の二柱。大御神の御稱とよて。所謂とちゴ記せるは。古語拾遺ふ。高皇產靈神。是皇親神留伎命。神皇產靈神。是皇親神留弥命。とのるら據れひ。名義神ハ加年を訓ぼし。加美と云れ。更加年を唱ふるは。語の上ふ在て。直ふ下語ふ續く故ふひ。其は神伊邪那岐命。神速須佐之男命。まと神避神議れどの如し。閒よ。てふをは。字あれむ。正しく加美と云ひて。加年とれ云は。其れ神の名。神を生むふどの類。みふ同じ。然るふ仁明天皇紀の長歌よ。賀

美侶伎を見え。常陸風土記に。賀味留岐賀味留彌と有る。此ら古きことなれど。今も加美とも訓ぢくや。されどカムロギ。カムロミを云ふるを。數ふるに違あらじ多かるよ。カミロギカミルミと云ふは。此外ふ古くも見當らぬ。されど此は誤まるも有ぢくや。呂は助語ふて良理琉禮とも活用く辭なり。但し呂をも。活用くまじく思ふも有むに。其も内を宇都呂。囊も布久呂。凝を許袁呂。丸を麻呂などの類いくらも有ぢし。岐は男神を云ひ。美は女神をいふ。伊邪那岐。伊邪那美命の岐美と同じ。但しギと云ひ。ミを云ふ言。意をいまだ考得ぬ。されど若くは。岡部翁の說に如く。岐を男君。美を女君の約まりたるならむに。まと沫那藝。沫那美。神。頰那藝。頰那美。神も同例に。猶伊邪那岐。伊邪那美。神の下ふ云べし。然れど。加牟漏岐。加牟漏美と申しを。即ち御祖男神。御祖女神と申し意なり。牙古なはち神ふて。此を直に皇産靈。大神。二

柱の御靈なれば。唯うち任せて。神とのみ云へど。即ち御祖。大神の事なれるなと。上に云へるを合せ考へて悟るべく。葦牙比古遲。神をも以下。諸の神さちを神と云は。御祖。大神を。神と申せばよりて轉りて。各く其御功德の靈妙きを。称へ申せるなとなるを辨ふべし。ちて此二柱を男女別さじ。一ト柱ふ申しを。と紀は。加夫呂と稱へて其を出雲國造神賀詞に。高天能神王高御魂神魂命とある是なり。此を加牟呂岐と訓ては。神魂命ふ係らじ。加牟呂美と訓ては。高御魂命ふ係らじ。然れど唯に。加夫呂と訓を。外なれて知ぢし。出雲風土記に。熊野加武呂命をなるを。須佐之男命のなとに。男女を總ての称へに非ぬ。加武呂とばのみも云る例なり。師も岡部翁も。加夫呂伎と訓れさまを称をじ。舊訓ふ。高天能神王とあるを。此を思ひてなるぢし。まさ師く。王字を例ふき書ざはあれば。祖を誤れるならむと云れなれど。此を高天原の王さる義をもて。姑く借て書

さるあらむ。ちて此加年呂と稱ふる言は義を縣居、大人は神漏伎と神須倍良袁岐美、神漏美と神須倍良米岐美なりと云はき。師は加年呂は神生祖なり。上下の阿と夜とを畧き、礼於を切まて呂と云、り。生祖とは人ふはき物よまれ生出る始の御祖なる由なりと云れあり。此說いかきも理を叶ひて通もきを。已ゞ思ふ處を然らば、上は云如く、多く加微てふ語は活用ふて、加年呂とは云へるなり。然るは大人さちいはゞ、加微てふ語の本義を思ひ得られぢる故ふ。其說甚く迂遠し。其を加微と云語ふ、やごのて御祖さふ意は籠りさきバ。殊ふ生祖ふゞ附て云ばきふ非ず。況て呂は多く添れる詞ふる哉や。古語を成さけ言少ふ分りよ知やうふ解べきふとふり。餘り長く延約ふどれる時を、其意を、いうやうふも叶ふばれど、然ても却りて古意ふ疎く思を添れれり。さて今禿子や云ふハ童女の髮いと短く搔ふでさる姿を云ひ中ふも切禿子と云を髮を短く切そろ子て冠せる狀ふ見もるゞ其やごのて加備の形ふ似さる故ふ同くカムロとは云ふるなし是も一ふ似れ證ふり又若くハ今のカムロちふ童女の姿の直ち ふ御祖大神の御有樣ふ似さりれむ も亦知べらば此を猶よく考べし。かくて此神魯岐神魯美と申ゞ御稱は高皇產靈神皇產靈命を申せるゞの始りて常陸風土記ふ諸祖天神云賀味留岐賀味留彌やあ依如く凡ての天皇祖神さちは更ふり御祖ふらぬ神等をも尊みゆハかく稱せり。そを神賀詞ふ高天能神王高ふ神魯岐神魯美命とのれ御魂神魂命とまゞ云て下文祭詞大嘗祭詞鎭魂祭詞鎭火祭詞六月月次祭詞年祭詞更ふり祈れバ神漏伎神漏美

命とゐるも。高皇産霊。神皇産霊。命を申せるおと論ひおきゑ。大殿祭詞。大祓詞。遷却崇神祭詞。おゼよも。皇産霊。大御神と。天照大御神とを申せるゐて知ばし。然れど本は。二柱産霊神を申せる御稱を。大御神ゐも申ゐも末ゐるおゼ。別ゐ其大御前ゐばゥア白ゐ祝詞ゐ。皇吾睦神漏伎神漏彌命登。とゐる登てふ辭よて知ら法。大御神も女神ふませど。神漏伎とハ申ゲさく。然りとて。神漏美とのみ申さむも。事缺さる様ゐれど。神漏伎神漏美との称して。其も神祇官ゐ登てゐ辞りて。其意を知らせさる文ゐり。八柱神の最初ゐ。高御魂神魂命ハ。本ゑゆ坐せど。餘ゐ大御膳都神。大宮能賣神。辭代主神ゐども坐せば此祝詞ゐも皇吾睦神漏伎命。神漏彌命登。稱辭竟奉久と申せア。此

も受ばアて。皇祖神とは申がさ知ゑ。尊みて御祖ゐ準ゐ申せる故ゥ。添さる辭の登ゐ法を。思ひ合せて辨ふ法し。岡部翁説ゐ。神呂岐神呂美と申ゐも。高御魂神魂命ゑアゐ始ゐて。伊邪那岐伊邪那美命。天照大御神まで。凡ての男女皇祖神を申ゐと云れしを。記傳ゐ。いかゞゐアとて。神呂岐神呂美と申ゐ称も。何ゐの皇祖神へもアゐる言ゐれども。祝詞ゐ申せるは。何れも高皇産霊神と。天照大御神ゆ。二柱のみを指て申せるゐと明し。と云れしハ。却ていのゞゐアゐ。其も神賀詞ゐも。高天能神王。高御魂神魂命とあ法。城や。まゝ古語拾遺ゐ。神呂美を。神皇産霊神ゐ當さるも。心得ゐ事ゐり。と師の云れしも委ゥらば。此も いまゐ神皇産霊命の。女神ゐる由をゞ。考へ得られざりし故の誤ゐアゐ。

ちて孝德天皇紀ゐ詔ゐ。我親神祖とゐるは。仲哀天皇を申し給へアゐ。神賀詞ゐ。加夫呂伎熊野大神とゐ法も。須佐之男命を申し。おも大国主神の御祖ゐれゞ申せゥ。風土記ゐ。熊野加武呂命と申せ

るも同じ。仁明天皇紀の長歌ふ。賀美侶伎能宿那毘古那を申せ法を尊みて礼ア。国土を作堅めさるひし祖あれば。かくも申べきあり。まさ万葉あどふ。皇祖神とゐるをも。加年漏岐と訓るは非ア此を須賣漏岐を訓べし。まさミオヤガミを訓むも惡らば。ちて此言。師を神と皇と替れるれみふて。同じ語ア。と云れさきど。少ちく違ひ有べし。其を神祖ハ。此の二柱よア始めて。上代の御祖等ふ限アて申ばを。皇祖を。皇美麻迩々藝命よア以來。近き御代くまで我申ば如く聞えさめ。此詞の差別を少ら申さば。我親神呂岐。神呂美。命とハ申せど。我親皇祖命とを申ちば。まさ加年呂岐。加年呂美とを申せば。須賣呂岐。須賣呂美とを申さば。されを以て。異ある所以を知べし。猶須賣良岐てふ語のをしは。第百二十四段ふ注ふを見る

し。抑ふの大神の。天地を鎔造ア。世界を開闢き給へるよ就ては。外國くふ。其御傳へ。ふくは有法らば。故普く其古籍を考ふるよ。元始天王。大元聖母と稱せる神ゐアアれ我ゞ皇産靈大神ふることと疑ふく所思さア。されど此說いを長けきバ。ふ〳〵ふ記さ。赤縣太古傳の。盤古眞王紀と云を見て知べし。○三柱。師云。凡て古は神をも人ゐも數ふてを。幾柱と云ア。神を本をアの事ふて。皇子等ふども然云へる。古事記ふ常ゐ古を。ふめ。や〳〵後ふを。清和天皇紀の大命ふ。大政大臣一柱と詔ひ。空穗物語ふ。大將ふる人ゐ女等の事を云ふ。今一柱を云ア。皆貴人の うふのふとふり。書紀ふ。佛像一軀二軀ふぎあるをも。一ぞし。ア二ばしらと訓り。落窪物語ふも。佛一ぞしら。佛二ばふらふどゐアア。はさ文粹。前中書王の文ふ。白檀觀世音一柱とあり。漢文ふを。ア。於らし。扨まさ稱德天皇紀の宣

命ふれ。二所の天皇とゐまし。中昔の歌物語などふも。貴人をばみな幾所と云へり。今世の俗言よ。御一方御二方と云ゞ如し。ちてかく柱をしも云所以も詳ならぬ。はゐ上代ふれ宮造るおをを云ふ。底津石根ふ宮柱太知と稱ず。或は柱は高太くれども云ひ。大殿祭詞ふどふも。柱の事をれみ旨といひ。はと哀祈御子れ室壽の御詞よ母築立柱者。此家長御心之鎮也とまゐ詔ひ。其外神代の始ふ伊邪那岐伊邪那美大神天之御柱を行廻ゐ坐しを始めて。柱を云へるおと多く。後よは神宮ふ心御柱ふど云こをもゐゐ。斯て其柱も。ゐのまと竝立る物ふ故ゆ。もと皇子等れどの數多立竝坐を賀て。幾柱と譬へ申せしふや有む。

賀譬へし例は。万葉二ふ。眞木柱太心者。と大ふして不動心をふと。二十ふ。麻氣波之良。寶米豆豆久禮留。等乃能其等己麻勢波く刀自。於米加波利勢受。れをゐゐ。今云。眞木柱誉て造れる殿の如く。在せ母とじ面変ゐせばふゆ。はと數立竝ぶを木ふ譬へふる。は。同二十ふ。麻都能氣乃。奈美多流美禮婆伊波妣等乃。和例乎美於久流等。多く理之母己呂。と見え。松樹の並さるを見れバ家人の。我を見送るとて立と。私記ふ。古以貴人喩於木故爲一るゞ如し。と云こをゐゐ。

柱一木矣。以賤人喩於草故謂青人草也。と云へる此說はわろし。とゐゐ。篤胤いま此說よ因ゐれゐ柱を稱ふ物れ。其本義を考ふはふはゐ彼天神の賜へゐし天瓊戈は。皇祖

二柱大神の淤能碁呂嶋ふ衝立て。国中に御柱と爲し。天之御柱と見立給へりとある。おき始ふるゞ。おの事第五段に傳ふ委く注ふべし。猶おに本筑想ふよ。天地いまゞ生ざりし時よ。一物生出て。其中ふ含はぬきりし牙てふ物あり。此物もえ騰めて天国と成ゆ。天に御柱とも成るゞ。此牙におはち神ふて。男易に形ありしを。前ふ云はゞの如し。さて彼天瓊戈は。去れたち皇産靈大神の御靈ふて。其狀に。彼牙ふ則とれる物ふはおと炳焉く。諸越に古傳ふ謂もる。玄牡これあり。猶第五段の傳見るべし。此後ふ。伊邪那岐大神の御身ふ。成餘之處ありとあはゞ。其形に。瓊戈よ似ゐはゞ物ふるゞ。此去れはち男莖れり。

此に多〳〵ふ似さるよ非ず。固より然るべき由ある事に。第六段の傳ふ云を見べし。然れど。天御国ふ天に御柱あり。牙より成れる物是おゆ。此御国ふ。国ぢ御柱ありとあり。天瓊戈即これおり。故おに御由縁ふ依て。いふし牙は。神の大宮は更ふも申さば。大君の御殿よも。先その中央ふ。太じ柱を衝立る。此を心に御柱と云ふ。おはかれ国中の御柱ふ擬牙。まと其を大御身の長ふ祝ひて。天之御量柱とも云り。此をいを嚴重ふれし給へる事は。下ふ云ゞ如し。第五段の傳。まと度制考よ委く注ふを見べし。然きば牙去れたち柱よて。柱即ち神ふれど。一柱と云ふも。一神と申にも同じ義ふて。孰も美とる言れるゞ。其を比登迦微を云ゑ。比登波志良とにみ申にはいのふと云ふ。迦微とは。牙を云ゞ

本よて。靈異き德ある物を廣く云ことふと有れど。殊ふ卓絶さる神の御上ふ云ひては。中くよ希らちからぢる處あ已。且いのふ尊ゐも。人の上ふは云がゐし。柱と神よ限らぢ。人ふも廣く云ちとふほゞ上よ。物の成整ひ鎭ま已さるを云言よて。いゝふも然るぢき稱辭ある故ふ。自ゐゝら柱とれみ云ちゞ成れほふるべし。實ふも世よ此柱ばゝ已最も太じく珍さ物ハ有ることれし。されど人ゝ男柱あるも。御祖大神れ大御身ふ効ゐる物よて。かの成餘之處ゑれもち是ふるゞ。万の事業これより起る。いとも珍さき物れることと。今更よ言べくも非ゑゝし。但しかく云へど。女神ふ称むも。いゝふぞや思ふも有べゝれぞ。既ゝ称辞と成さる上ゝは。男女相通もて云むこゞ。何でふ事ゝ有らむ。然れど古ゐ神を始

処奉已。貴人をも幾柱と計ふほハちる事よて。其も御壽命を長く固ゝれ。御心意を太く靜ゝく坐ませと。美祝ひて申せるちと。更ふ論ひあゐちと無し。此よ已延て普く人の身よも擬ら冥。心の鎭まりゞぞ爲せりれる。猶第五段ふ云を合せ考ふぢし。字書よ。皆也とも。偕也とも。併也とも。比也とも注し。せり。是を那良毘尓と訓む。古の語ざまふあらゞ。○独神成坐而とは。次くれ女男相耦ひて成坐る神さちゞ別ちて。唯一柱ぢ成坐るを申せ已。竝兄弟れふ已子を獨子と云ゞ如し。神の下よ。登てふ辞を添て読む。師説の如くゝろし。ちて成ゞ那理ゞ訓ふ於よて。師云那流と云言ふ。三ッの別ゐ已。一ッふは無已し物の生已出る戌云ふ。人の産生を云も是ゐり。神れ成坐と云む

其意ありて。二ツなり。此物のかはりて。彼物に變化を云ふ。豊玉比賣命は産坐時に。化八尋和邇になりひし類なりて。三ツは作事の成終るを云。国難成とゐる成の類なり。此三ツの差ひを。りて。漢字は生成変化などゝ異あれども。皇国は古書りて。訓の同じきをば通用ひて。字にはしも拘はらざるなと多し。此の成坐も。成字は意とは少う異ふして。書紀に所生神とゐる字のなゝろあり。○隱御身矣とは。此三柱神あちは。おほ天之御中主神は。此後に其御名の聞ゆるなと別く。其儘に。本は高天原にある。謂ゆる北辰は中に。常なる不に隱り鎮座坐し。皇産靈大神二柱は。此後に。天日は御国にも御坐し居れど。此なとは。石屋戸皇美麻命の。御天降に就ての事実を見て知べし。但し此は。其御本體には坐まはず。必幸魂奇魂は神なるべき。其

由は。其処くに注ふを見るべし。其本は御在所は。同じ北辰なるが故り。其御本體は。永く其所に神留坐し。遥々く遠く隔りて。此国土には。終に其御形を見奉るなと別き故り。かく語ひ傳へさる物なり。師云。御形体のなきを。如此言と心得るは。後世は生さらしなり。少毘古那神の事を。産巣日神は。自我手俣久伎斯予也と詔へるを思ふべし。御身なくて。御手は有べきなり。此手俣のと。世人は心ろは如何思ふらむ。凡て神代の故事を。仮は寓言の如く見るは。例の漢意は癖にして。甚く古の傳への意に背く。此次に。天日は成坐ける二柱共に。御身を隱し給ひきとゐるは。此大地球中に非ざるが故なり。況てや。又遥に遠き北辰星に。隱坐まはり於てをや。されど此御国にも。其御霊の留り坐なと疑ふく。天御国は事は申はも更なり。○上

件三柱神ゐ。師説ふ。如何れる理あ已て。何れ産靈ふを已て成坐已ぞ云ふと。其傳無々れば知ゞさし。然るは甚も甚も。奇しゐ靈ふく妙ふ理ふをりてぞ成坐々む。ちれど其はさらふ。心も詞も及ぶ能きれら祢ば。固已傳のふ妃ぞ諾ふめける。凡て古の傳ふ紀事を。己ゞ心以ゑ。其理を考ゑて。推あてふ説くハ。外国の習ひよて。いと妄ふるゐ已ばれ已。はと此神さちは。天地ゐ已も先ゞちて成坐ぬまば。天地の成ることゑ。此次りあまむ。此神さちれ成坐るゐ。其より前ふるふと知るべし。○今云。これまでの説ゐ。信ゑ然るふとふ已。あゞ虚空中ふぞ成坐しけむを。いまだ天も地も無き以前ゐ。いぶくも〳〵みふ空ふき大虚空ふめゑ。○今云。大虚空のみふゐ非ゑ。北辰は天地ゐり先ふ在て。高天原と云ゑ已る即其処ふり。古事記ふ。於高天原成といひ。書紀一書ふも。高天原所生神としも云ふ。後ふ天地成ては。其成坐已し處。高天原ふれ已て。後まで其高天原ふ坐くゐ神さちれゑゞ故ふり。元來高天原ありて。其処ふ成坐と云うゐ。ゐ云れしは委しからゞ。然るは元來高天原と云處有て。其處ふ成坐ふ。ふと。上ふ云ふ如くふきば也。斯て後ふ天日成ゆて。其をも高天原と云ゐ。はと後の事ふるふゑ。下第廿九段の傳ふ委ふく注を見るばし。前ふゐ右ゐ師説ふ依て。於天御虚空云くと文を成せるゐ。惡うゆしこと。既ふ上ゐ云るゞ如し。ちて皇産靈大神ゐ。如此いみじ妃御德ふ故ふ。上代ゐ已殊ふ重く崇祠らせ給ひてまぶ神武天皇ゐ御世ふ。大御身ぶうら顯齋して。高皇産靈神を祭已給

ひまさ島見山中ふ祭庭を構へ皇祖天神を祭り給ひ
たこを見えさり。はさ神名式ふ神祇官坐御巫祭神八座
並大月次新嘗の首ふ。此二柱神坐め。此八座の神等を祭り給ふ
事も。神武天皇ゝ御世ゝを始ゝり。ふゝ此等のことハ彼御巻ゝ委く注を見る
べし。此餘ふも。此二柱神を祭れる社ゝ。神名式ふ多ゝ侯中
ふ。高皇産靈神の御社ゝ。山城国乙訓郡羽束師坐高御産
日神社。大月次新嘗。○羽束ハ和名抄ゝ波豆賀之とあり。考證ゝ今在下島羽西南羽束石森今在志水村と
云ふ。大和国添上郡ふ宇奈太理坐高御魂神社。大月次相嘗新嘗。○
師云。持統紀ゝ新羅の調を奉り給へる五社の中ふ菟名
足と侯るゝ此社ふり。まさ三代実録ふ法華寺薦枕高御
産栖日神とありて正三位。まさ従二位を授奉り給ひしも。此社ふり。十市郡ふ目原坐高御

魂神社二座。並大月次新嘗。○清和天皇紀貞観元年正月
廿七日。従五位下。目原高御魂神従五位上と
あり。按ふ二座の中一座ゝ決ゝ免て神魂命ふるべし。其ゝ
伊勢国度會郡ふ伊佐奈岐神社二座とありて一座は伊
佐奈弥神ふる類。餘ふも例多ゝり。對馬国下縣郡ふ。高御魂神社。名神大。○此社ゝ仁
明天皇承和四年二月戊戌奉授従五位下。清和天皇貞観
元年正月廿七日。従五位上。同十二年三月五日。正五位下
とゝ侯り。猶古の二社の事ゝ次段ふ引く。
顕宗天皇の御代ゝ事を考へ合ゝべし。はさ山城国久世
郡ふ。水度神社三座とゝ侯る中ゝ一座を山城風土記ふ高
彌年須比命とゝ侯。此社も貞観元年正月廿七日。正六位
上水度神従五位下と見ゆ。ふゝ此社
の祭神のこゝ。第四十六段
ゝ傳ふ論ふを見るべし。
ゝ。神名式ふ出雲国出雲郡ふ。神魂神社。まさ神魂伊能知
怒志神社。此御名ゝ。加の大国主神の石ふ焼著きて死り給
へるを活し給ふるおどゝり。負給へるりや。

神魂意保刀自神社。此御名も。此大神の。女神ふ坐まに。神魂伊豆乃賣神社。あの御名は。心得ゲされど。伊豆も清一ぢの證あること。上ふ云ゲ如し。神御名ゆや。まさ同郡ふ。神魂き意あれど。産霊の德を称ヲて申せる御子。神社と申奈もあり。はと清和天皇紀ふ。貞觀八年三月二日。授大和国從五位下。神皇産霊神正五位下。とも見えさ。此も目原坐高御魂神社。二座の一座ふ。抑ふ此大神の御社の。官ふ知られ給はざるも。諸国ふいと多ゥ。ぢく所思ゆる。其は姑く置て。今世ふ。第六天神を云て祭れ侯社數多ゥ。ゆ。て。其祭神を面足惶根尊ふ。ある由云ふ。きど。此も附會の說ふれむ取るふ足らぬ。古くハ。面足惶根命を祭れる社も。何処ふも有ること無し。其由も。此神の出さる下ふ注べし。實も皇産霊大神を齋き奉れる社ふ侯

ぢきふと已委き考ゆ。て。其もまぢ印度の古傳ふ。此大地の頂上を放れて遙ふ高ぢ處ふ。大梵天とも。大自在天とも稱ゆる天界ゆ。て。其主宰ぢ神を。大梵王とも。大自在天王とも申て。此も天地世界を創造し。人種万物を生成せる祖神ふ侯由云ふ侯ゲ。此も我ゲ皇産霊大神の古事ぢ。彼国ふ傳ハれるふて。いと正しき說と聞ゆれむ。ゆ。まさ佛書ふ。二十八天と云こを云て。其第六天の主を。右の大梵王ある由ふ牽強せさるも佛祖悉多ゲ妄誕ふる我。其佛說の世ふ行もれてよ。第六天ふど云ふとは稱ふるを。後ぢ物知らぬ神道学者ら。其佛国の称ふるを惡ひ。且かの天神七代。地神五代ふど云を。妄說れ。こも知らぬして。其第六代ふ當れるゲ。面足惶根神ふる故ふ。此神也と為さるふて。此も却りて太じき非事れ。然きば第六天神を云も。強說

ある上に。我大皇國に良はしからぬ名ある事ハ論なき物ゝら。其神實に最も尊き大神に坐ませバ。粗畧に思ふばきにハ非ざるなるべ。此説いと長ゝるを。此に大畧を云へるあり。委くに印度藏志の大千世界品の末に注に見るべし。ちて因ふこゝ〻に論ふばきにを有ア。其にハ於神に位階を授奉ア給ふ事ハ。人に甚く心得難ふにる事なるが。今にいと重ねにやゝ爲さる故に。其由にふ記し辨ふばし。然るに天武天皇紀。壬申歳七月の處了。高市社。牟狹社。村屋社の神とち。高市社に事代主神ふ坐し。牟狹社に生雷神ふ坐せり。村屋社にいまゞ考得ば。天皇に御軍を。幽ふ助奉ア給へる事有ろバ。軍訖て後ふ。敕登進三神之品以祠焉。とあア。此に唯その社〻の班列を。上給へる事と聞ゆれゞ。是ぞ後ふ位階を奉ア給ふ事に起原とや云ばき。後の位階に事ふに非ざる故ふ多ども三ども記さまば。斯て正ゝ位階を奉られし事は。孝謙天皇紀ふ。天平勝寶元年十二月の處ふ。八幡大神ふ一品。比咩神ふ二品を奉られさる是始ふア。然して二年正月の處ふ。奉充一品八幡大神封八百戸。位田八十町。二品比賣神封六百戸。位田六十町とあア。祿令ふ。凡食封者。一品八百戸。二品六百戸。と見え。田令ふ。一品八十町。二品六十町。とある制の數ふ合へり。是をゆ以前ふ。御紀ゝ。崇神天皇七年。定天社國社及神地神戸。と見え。まゝ顯宗天皇三年。高皇産靈神ふ。神田を献られさる事も有れど。品位の事ふに於ゝらに。其にいまゞ。品位ふどの御定にふき御世ふれにる法し。石原正明が言ふ。此時に。

神封神田を寄らるゝ法如爲る。品位を奉られあるうて。本
とゐ格式を立られきさるゐも非ず。尊卑ゐ階級とはゞては
所思ざゐれむ。其ゐ此時代ハ。万ゐ位階を物安る事を多
くせられて。外位を内官ゐ敘し。勲位を勲
功あき人ゐ賜ひ。上正六位上を敘し。僧侶ゐ二色九階を勲
置れさるも。皆此頃あり。然れど其ゐ故りゐて。かゝ法事
も有しゐ
れゐ。
ゐ云ゐ。然も有ゐし。是とゐ後は。稱德天皇紀ゐ。天
平神護二年四月ゐ處ゐ。甲辰伊豫國伊曾乃神。大山積神。
竝授從四位下。充神戸各五烟。伊豫神。野間神。竝授從五位
下。神戸各二烟。とあるとゐ次くゐ。此政行れとゐ。正明説ゐ
かの八幡大神ゐ一品。比賣神ゐ二品を奉らきし以來。承
和以前ゐ。をゝ〳〵此事無りしと云へるも。甚麁あり。上ゐ
引さる。伊豫國の神等ゐ奉られしを始ゐて。其間ゐ數ゐ
も尽されゐ多ゐるをや。さて神階ハ。四品以上四階あり。

そゐ文德天皇紀ゐ。天安元年六月壬申。在備中國四品吉
備津彦神。授三品。とゐるゐて知べし。さて五位以上十四
階。正六位上一階。安法て十五階あるゐ。此
ゐ令外の御制あり。正明も既ゐいへゐ。
是とゐ此ち。承
和。嘉祥。貞觀。元慶の頃は。神位のゐ多數知らゞ見えさゐ。
然れども。多くは神封位田を充られ。ゐ。多く其社くゐ故
きての尊卑を。定ゐ給ゐ。ゐ位階と通ゐ。故本とり今ゐ神
ゐ。位階の卑き所ゐ。
り。本とゐ卑き神ゐ。位階の高ゐも多ゐ。まさ一神の社
諸所ゐ數あゐを。其中ゐ一社ゐ。位階を授け給へるゐ。そ
の一社ゐ限れるこゐゐて。其餘ゐ關るこゐゐし。其故ゐ
同神同社とい不ぎも。階級の高下あゐ事を辨ふべし。さ
て或説ゐ。神ゐ位階を授け奉るは。位田を寄らゐ料ゐ
りと云へきど。正明ゐ云る如く。此ゐ神位といふ事の。似
ゐゐはしゐら無故ゐ。さゐ事ゐやと推量ゐ云るゐり。そ
い凡て王臣ゐ賜ふ食封位田ゐ。其人のゐき後ゐは。公ゐ
收らるれバ限ゐるを。神位は永ゐれど。一日ゐ數百社敘
位せらきさる事も多く。さゐゐり度くゐ加階ごとゐ。食

封位田を寄られず。天下の戸田は半ゐ過て。社ゐ附はて給むゝし。然れど別ゐ。位階の稱を立らるゝきゝ。王臣を敘ゑる位號ゝ其儘ゝ用られゐ。依て混むしけきど。此は正明説ゐ。神と神どちと尊卑ゐて。人臣と階とと別ゐゑと心得ゝし。内記式ゝ。神位記式ゝ。勅無位某神今奉授ゝ某位とあり。奉字を加へ。さるばゝゑてゝも。王臣の位と異ゐる事ゑゝ知べし。今云ふ伊勢の大宮を始め奉り。紀国日前国懸大神ゐどゐ。位階を授け奉ら依ゝ事ゑし。ゐと至て。尊く坐故ゐゑ。親王と四品と。諸臣と一位とゑも尊卑を思ゑば。神階の五位六位と親王と一品より母尊く御坐ゝ。されど一品親王。一位大臣ゐて。六位の神を拜せむゐ。禮ゐ違ふこゝを。然るを経信卿。母集ゐ。北野社の前ゐて。大臣上達部。みゐ車をゆ下ゝるゐ。経信卿のみ。車ゐゞらゝゑ渡されゝる。宮司出向ひて。此所ゐて人

人も下させ給ふゝと云ゑ。さらゝ体ゐて過られゝ。依由を。母の卑ゝて問れゝ。依ゐ。彈正式ゐ。四位と二位ゐ。車をゆ下ゝと侍る。菅右府二位ゝて侍るゝ神ゐ。ゐり給ひても。道ゐ違ふこゝと有まじれど。車をゑ下れず。却て違へるゑゝ。ゝて。神も受給れゐと申されゝる由見えさるゝ。彈正式ゐ。凡四位以下逢一位云ゝ。下馬餘非應致敬者。皆不下とあるゝ依ての事ゑれど。神と人との境を知られゝゑて。定られゝむハをこれり。神ゐ奉る物を幣物といひ。王臣ゝ給ふ物を祿物と云ふ。北野と祈年穀奉幣ゐ預さゝひて。祿物と給ゝ。かくの如く品類懸隔ゐる事ゑゝ。神と神ゐて。爭くおはし坐ことを抑おれと。神ゐらず。神階。人階別ゐる故ハ明ゝりゐむ

を禮まひ給ふ餘ゝ。ゐかゝ依事も出來初ゝ。ゝきど。神は神ゝ敬奉ゝて御坐ゝきゝ。尊卑の階級を。御心ゝ任せて進給ゝむ事は不禮ゐゝ思ゐ依と。己ゝ惑の深きゐや。と言ゝ。此と冠位通考と云物ゐ記せるを。甚く約ゝ。ゑて挙おれず。委くと本書ゐ就て見べし。此は一わ

あり然る說とは聞ゆれど。猶おらく考ふるに。古へ品位の御定ゑら無ひしを。其御定いで來て後も。親王以下諸臣ふれみ賜ふぢき事と思ゆるに。神等ふし母授け奉ひ給ふことは。凡人の上ゑひは。如何とも推量ひ奉り難きことゆるを。神等ゑひ望み給ふ事ぢ有て。此を普く行ひ給ふ事と成ぬるは。やがて神の御心ゆること論ひふし。然れど古へふ無き事ふひとて。粗略ふ思ひ奉るべきふ非ゑ。故ゑ〳〵ゑ其位階の進み給へる趣を。國史及び其後の諸書ふ考へ合せて。其大概を記ゑぢし此ことを委く。參考神名式の附錄ふ記し辨へむとぞ。其はまず文德天皇紀ふ。仁壽元年正月庚子。

詔天下諸神不論有位無位。叙正六位上。と見ゆ。これゑ依て見る時ゆ。天下の諸神悉く。正六位上ゑ叙され給へること〳〵聞ゆれど。此時の太政官符を考ふるふ。品〳〵差等ゐり。其ゆ是まで既く。五位ふゆり給へる神さちゑは。更ふ一階を增し。無位の神をば新ふ六位ゑ叙し給ひ。唯大社并名神ゆ。無位と云へども。從五位下を授け給へり。さて其外の大社并ふ名神ふらぬ。正六位下以下。無位の神さちをぞ。凡て有位無位を論ぜず。正六位上ゑ叙し給へるゆり。但し此時。本より正六位上ゑ叙し給へるゆり。但ふく。本の如くゆり居給へる神ゆちは。叙位ゑ。其ゆ未考ふ得ず。斯て朱雀天皇ゆ天慶三年庚子正月。天下ゆ諸神ふ。位一階を增し奉ひ給へゆること諸書ふ見ゆ。ゆきぞ諸神增一階の初度ゆる。○是ゑり前。宇多天皇の寛平九年十二月より。五畿七道の諸神。三百三十社ゑ。位一階を授け奉り給ふゆると有ひ。此後ゆ。白川天皇永保元年辛酉二月ふ。又天下の諸神ふ位一階を增給へひ。これ二度ゆり。是より

後は。崇德天皇は永治元年辛酉八月。まと一階を増し給ひ。おれふて三度おゆ。おの次は。高倉天皇は治承四年庚子十二月。是四度おゆ。安德天皇は元暦二年乙巳三月。おれ五度おゆ。土御門天皇建仁元年辛酉二月。是ふて六度。龜山天皇の弘長元年辛酉二月。おき七あゆ。後宇多天皇は建治元年乙亥七月。これハ度おゆ。後圓融天皇は永德元年辛酉二月。おれまで合せて九度ゆ。各一階ずつ増し奉ゆ給へゆ。此うち多く辛酉年おるは。この天慶以下の処ハ。定まれる例の革命は御祈おりき。扱ハえとるを考へ集めさるおり。此書等のこと。此りは煩ハおれず記さば。然れど。文德天皇は仁壽元年ゆ。推おばて正六位上ゆ敘せらき給ひし神等ハ。悉く正四位上ゆ成給ひ。

そのうみ從四位下の神等ハ。皆正一位ゆ成ゆ給ゆ。況て天慶より以來。凡そ四百餘年の間。右九度は外ゆ位階の進み給へる神等も。數ふるゆ遑あらば。まと上ゆ挙さる外ゆ。已ゆ見落せるも有べく。まと書ゆ記し洩さるも有ぬばし。然れバ。極位ゆ至ゆ給ゆるゆ多ゆるべき事。推て知べおし。仍て思ふゆ。永德以後。增一階の事は聞え扱まとざるも。大抵極位ゆおり居給へるゆ故おるばし。天下の諸神とゆるゆ付て。論ふばき事ゆゆ。其はま於仁壽元年ゆ。有位無位を論はば。正六位上ゆ敘し給ふと有るは。天下は有。古ゆ神さちの事ゆらむゆは。此餘ゆ。無位の神坐ばき謂おし。但し其より後ゆ。由ありて新ゆ齋ゆれ給ゆる神等は。今云ふ限りゆ非ず。おかるゆ此後ゆ。無位某神ゆ。某位を授け奉ゆ給へゆと云おと。国史を始め。其外次くは諸書ゆ數多ゆゆ。いを不

審(カレ)なる事あり。依りて按(オモ)ふるに。天下の諸神とはあまど。有由(ユヱ)なる神等ゐはゐらで。此(コヽ)を官(ツカサ)ふて祭られ給ふをはじめ。国内の神名帳あどゐ出さるる。又は其外ゐも由ゐあて。官ゐ知られ給ふる神等ゐよれみ。御位を敘し給へるゐ。官ゐ知るき給はざるゐ。漏(モレ)給へる事と知られあり。然らざれば。後了無位の神と云ハ。ゐるまじき事ゐれば。凡て神位封戸あど階を奉り給へる。本の由(イヘ)縁を論ふ序ゐ。少々云れみぞ。ゐ委くハ。参考神名式に附録ゐい事を。俟て見るべし。

爾大虚空中(コヽニオホソラノナカニ)一物(ヒトツノモノ)生(ナリテ)而。其(ソノカタチ)状(カタチ)難言(ガタクイヒウキグモノゴトク)浮雲(ナキガネカヽルトコロ)出如(レ)無根係出所(レ)而。久羅下(クラゲナス)那洲(タバヨヘルトキニヨリソノナカ)漂蕩出時。自其中。状如葦牙(カタチゴトクアシカビノオヒソムルガヨリヒヂノナカレテアリ)出。初生於泥中而。有萌騰出物(モエアガルモノニヨリソノモノニテハジメテナリ出セルカミ)因其物而。始成坐神出御名(ノミナハウヤシ)宇麻志阿志訶備比古(アシカビヒコ)

遲神。次天出底立神。亦云天出常立神。亦云天出壁立命。亦名天角凝魂命。亦云天角已利命。亦云天角魂神。此二柱神亦獨神成坐而隱御身矣。

上件五柱神者。別天神。

爾ハ許〻邇と訓ぜし。上を受て下を起す所ある故ふ置と已。其は師説ふ。古事記の文法。ぜて一連の語終りて。次の語ゟ首ゟ。かれらゞ於是とも。故ゞも。爾とも云へる。此三乃辭を用さる樣を考へ合るふ。多く其處の語ゟ勢ふ隨ひ。調ふ任せて置るゝみふして。必ゞも各異ふ意ゟ有るゝは非ず。ぢれゞはと故爾とも。故於是とも。重ゟても置る。其も同じ去ゞれ已。但し右の三ゟうち。爾字勢ある處ゝ多く。はゝ故爾と重ゟさる處ゝ無し。こゝらを思へゞ。みゟ許い爾於是と重ゟさる處ゝ無し。こゝらを思へゞ。みゟ許い尓と訓べくして。加礼とは訓まじゟゞ如し。然れども又稀ふゝ。故字を置る勢ゞ全同くゝて。許く尓と訓むを已ゝ。加礼と訓ゞ優れる處もあり。大のと爾とも。於是ゞも。故ゞも有ハ。皆

今此俚言ふ。曾許傳といふ勢ある處あり。爾字於袮は曾許とおの於ゝら意通へり。まさ爾時に曾能と訓べ。曾能登伎と訓て也。許能登伎と訓て意通ふを。許能と許くや同じ々れも。許能と訓ことおの於ゝら字義ふも合へり。まさ是ば。許く爾を訓ことおの於ゝら字義ふも合へり。まさ是也如是と本同言ふして迦礼も如是有者の切ありあれば。迦礼と訓れも自通へり。

○大虛空之中は。一書に天地始発の処に虛中とも空中とも書あれど。末りも虛空と書されず。其於富蘇羅能那迦邇と訓ふ拠に。大字戎冠て文を成せり。

訓法し。一書に虛中。空中とも。ソラノカを訓み。其中を訓て。ソノカを訓さるを。那加の那を省さるよを聞えさに。

即いま大地の周外ふ見晴して。大空といふ際に。空し虛宙をひろく言に。法ばて曾羅ふ言を。空きを云語て。万葉十に。蒼天も往來ふ吾を。四に三空も。くに月の光。五に阿麻能見虛喩。阿麻賀気利見渡多麻比。云くふどに類を。此に謂も大虛空を云へるふれど。十八に。こふは曾良やしくし有。袮ず。十五に。みちの蘇良道に別を君。四に思。

空安らふくに。嘆虛安らふらぬ物を。二に天數ふ凡津子。十一に。心空ふり土も踏ども。まさ朝茅原小野に去を。也ふ空事を。九に吾ゞ念情安き虛らも。十一ふ月の空ふる恋も去るらもふど詠る類を。空し虛とをいへり。後の詞に。空寐。虛泣。虛言ふど言を。されず年那斯の年を。身を年とも云と同語にて。無実の義ふるばく所思也。

○一物生而は。御紀正書ふ。生一物。と而は法ふ因て。比登都乃毋能那理氐。と訓べし。一書ふ。天地初判。一物抑此段を。師言の如く。天地の成る初發を云へるふて。先其初ふ。此物を生出さ所ふ。ちて此物を何物ぞと云ふ。是即ち天日。大地。月豫美の三ふ成べ。物ふして。有る星ども。此より成ゝむと所思る由あり。其考へ。第百廿七六段の傳に注去を見べし。其物等を未分きば。一に淆沌て沌ふるを。御紀の最初ふ。天地未剖。陰陽不分渾沌

如雞子と云ひ。一書ふ。天地混成之時。と云る是ふ也。師説も混とは未分れ去して清りて一沌ふる古とよて即此物の始免て生出さ法を混成とも云るれ也や有り漢籍ども道生一と云ひ礼必本於大一分而為天地ふども云も或も未有天地之時混沌状如雞子と云るを此り思ひ合べし○西洋の延実登といふ国の古説よ太古の時ふ祁迩夫といふ大神無始ゟ也有て此神の口中より一卵を吐出せるゞ漸よ成長して此全世界と成れ也天地日月星辰人物みれ是卵中の物ふり是大神やゞて造物主りて世界第一の守神ふるゞ其神像ハ巨大ふして手ふ卵を捧ぐる形ふりと言り実よ由有る傳ふりれ也

○其状難言ハ曾能加多智伊比賀多久と訓ぢし。此ハ一書よ状貌難言と云るを師此ソノカタチイヒガタシを訓れさ法り依て文を成せり。ちて此文義ハ御紀の上り引法。混沌如雞子と云る文也續きふ。溟涬而含牙と云る則其状を云る也。溟涬をクヽモリテと訓る也舊訓のまゝふるゞ此外ふタユタヒテ。アカクラニシテとも訓みまさス。タヾヨヒテ。クラゲナス。タユタヒテふども訓さクラゲナ等を以て其有様を悟るぢし。さて牙を含むを云も卵の黄と白と混沌さる如き状の譬ふるゞ黄と云は牙よて古は萌上也て天日とふり白と云も一物の躰ふるゞ此も分判りす大地と成固まれると云と次くふいふ如し。但し黄白と云も雞子と云よ付て然は云ふれど実も其色知べらぢ但しアカクラニシテとも訓るを思ふよ其此物活發の気勢ありて或も明く或も闇く訓く旋くとして有れむ様よ聞もれむ是ふて其色をも思ひやる法し○序よ云釈紀り引る私記よ首ふる溟涬而含牙とある文を論ひて問此之溟涬而含牙也説彼文者皆云牙万物萌牙義也然則此云牙者非葦牙欤答案假名本全云含葦牙故存其文猶読葦牙也云くと有を思ふり。假名日本記よ含葦牙とふる誤ふる故り今本も春秋緯よ依て改免さる由ふり。ま法天霏とも薄靡ゝる物ふ法ゞ其いまりざて天日と為り。ま法ち法ハ此物後ふ萌上涬ぢて会易構合の状ふりを云法り。葦牙とは固を溟ゆ異ふる物ふれむ唯カビをふそ訓べれ然るよそのの萌ゆゞ法状の葦牙れして見えける故よ。混れさる傳れ

出來たるし。此れ實ハ。大空ふ現れ出さ法象れ。妙ふ奇ちく何とも名け難く。かゝ顯露ふ言ふ可らぢる。会易構合れ貌ふ已し故ふ。言ひ難しとは傳へゐるれ已。此を前よれ其形狀の譬へ云ふ物ふきを云へるうて。信よ其物の形狀むらむらとして。何とも言がさゝ已し故ふらむと思ふ已しは惡ゝ已き。其れいゝふとふきバ。溟涬而含レ牙ヲ云へるうて。其形狀の大凡れ知らふ〳〵を。譬へ難しと云ふ意よれ云べくも非ざるをや。此れ實れ構合の狀ふりし故よ。言ひ難しと云へふと著明し。抑ふの一物。今かくしも。天地と分判るべき期ふふ已てふそ。会易構合の形狀とも見え於ら处。其初处て生出ゝむ時れ。決处ていを小く。唯混沌さるけみふて。其中の狀ふど。見分於法きやうは非ざ已ゝむを。幾千年をゝ過行くふ隨ひて。

やゝやゝふ大く成もて行て。終ふ会元易元れゞゝも。名く法き形狀とれ爲れるふ法べし。此れ正しき證と爲ゐべき事れ無ゝれゞ。人兒の初处て胎内ふ宿りゝむ時より。月滿て生るゝまで。れ成立を想ひやゝ已て。かくハ推量已云ふり。必同じ理ふるべくぞ所思ゆる。猶との一物の事れ。普く外國くの古傳を考へ證して。思ひ得さ法說あるを。其れ赤縣太古傳。印度藏志ふどよ記せれむ。此ゝハ言れ处。

○浮雲れ。宇伎久毛と訓べし。一叢放きて漂へ法雲を云ふ。天神。寿詞よ。天。忍雲根。命。天乃浮餘の傳くふれ。游魚の水ゝ浮ぶよ譬へ。或ハ浮膏ふども譬へさるは。師。言れ如く。其物を脂の如き物。魚のごゝ已物と謂ふれ非ざきども。形ある物をもて譬ふれむ。ふとふてれ。其物の狀よ思成る〳〵事あれむ。中くふ已ろし。

○根係之所は。泥加く流登許呂と訓法し。御紀よもれゝ已。ちてれゝ訓已。此浮雲れ。多〳〵一物れ漂牙る狀を譬さるけみふて。彼一

物を浮雲の如き物と云ふは非ず。思ひ紛ふふかと勿き。○久羅下那洲も。古事記ふかく有ふ據れど。言義。久羅下ハ。久羅具禮と云ふ也約まりて。久羅具禮も。久羅久禮久禮ふて。一の物也。会易構合の狀り牙を含免るゞ。活發の氣勢ありて。或ハ明く或も闇く。久流〻〻。久羅〻〻。久禮〻〻也し。有れむ狀を云ふるれど。ちて那洲も。久羅具禮登志氏とゝ。久羅下那志氏。とゝ有べき處れるを。那洲と云へるも。是も古言の體ふふの。師説ハ。多陀用幣琉の枕詞ふど。漂蕩へふ狀を譬へて云。るふも非ず。と有れど然らば。其狀を云ふるれ。ぢるは世の始ふるハ。冠辞ふどやうの虚辞有ぢきハ非ず。然ふを枕詞れりと云。きしハ。言義を思ひ得られざる故ふるべし。然きぢ是

よりて後ハも。何ふ依らば。漂へる物の類り冠らせて。云ことゝも成々むゝし。凡て枕詞ハ出來さる例。大抵ゝくれ如し。又若くハ。壯鹿那須。如五月蠅。水泡那須ふど云ゞ如

〻。後世ハ冠辭の體ふ。いふとれく斯も云來ふるふも有ふべし。前ふ成文を撰ぢる時ハ。思へらく。水月ちふ物も。海ハ生る物ふれど。若ゐは此時海ハ既ハ有て。一物も。其海上り浮さる事ゝと。思ひ混ふべく思ひて。此語を除きさる事ハ。古史徴り委く云へるゞ如し。然るを後ハ猶ハく思へど。此詞あふゝさ。一物の有様いとゝく知らる〻。故ハ。省ゝば本れ如く書ふふり。さて此海中ふ生ふ。水月ちふ物も。今此一物の。大虚空ハ根係る処ふく。漂ひさゆゝむ狀ふ似さる故ハ。其名をむ負へふふり。此前後を心得る時ハ。海も既り有ゝむゝの疑い。ふゝるべし。故本のごとく此ふ加へさるれど。○漂蕩之時も。古事記ふ。多陀用幣琉之時。ぢふふハ依て訓ぢし。漂蕩。字も。神代紀ハ。ちれど。上件大虚空乃上方さる高天原ハ。かの三柱

神ゝ御坐せる。其下方ゝ空ふ。此一物ゝ生出て。其狀を言難々れぞ。虛空ふ漂ふ浮雲の。何處を根と。係る所ふくて在ゞ如くして有ゝ依由ふ。師云。此物のゝく漂ひ居る虛空中ふり。書紀ふ。虛中とも空中とも有ふを見て知べし。然るを如浮脂ぞいひ。久羅下那洲れぞも有ふ就て。此物海上り漂へりと心得むハいあく非ふり。此ゝ未天地成らざる時ふて。海も無れば。あゞ虛空ふ漂へる有り。かくて海ふ居る物の中ふ具れるぞゝし。〇自其中とは。彼大虛空中ふ生出て。漂蕩へ依一物の中ゝ。師もふゝ言れさ。〇狀如葦牙云く。葦牙は。師云。阿斯訶備と訓ゝし。書紀ふも然訓り。但し備を清て。伊の如く読ゝ。はゝ訶を濁るも。ろし。成坐る神ゝ御名の詞備ふて清濁炳ゝ。和名抄ふ。蘆葦兼名苑云。葭一名葦。爾雅注云。一名蘆。和名阿之と見も。葦牙とは。葦のゝ芽ゞ生初さ依を云名ふ。牙字は芽と通へ。和名抄ふ。玉篇云。亂茨也。茨蘆之初生也。和名阿之豆乃。と。ふる是葦牙ふ。葦の初生るを角具牟と云ふ故ふ。葦角とも云ふり。さて如とは。此ゝ其物の形ゝ。葦牙ふ似さ依ふ。只萌騰るちまの似さるゝみふゝ非ず。故書紀ふも形如葦牙と。有物如葦牙ぞも。ふる。此ふ因て。成坐依神ゝ御名ふし母負せ奉りを以て。其いぞゝく似ふ。ゝ程を知べ。今云。此ふる如ゝ。狀如葦牙と云ふぞ。泥中ゝり初生依ゞ如して云ぞ。〇泥は。和名抄ふ。和名比知利古。一二ゝを兼さるふ。後哥ふ。多く恋路云古比千と見え。を云ひけり。祝詞文ゝ。向股爾泥畫寄氏ふ。ふどゝ。土ふ水の淆ふるふて。俗言ふ杼呂と云物

あり。まさ土形築墻あどの比遅も是あり。ちて葦は泥ふ生ふ物あきば。譬へさる意は聞えあふが。其葦ハ。一物の生初より。其中ふる物の萌騰るはでハ。最久しかりけむが。其間ふ生出し例り。下ふ蛭子を葦船ふ乗せて放さるを思ふべし。然れど未草木の無きあどあるふ。葦も既ふ有しをや。

如葦牙と有は。葦ハ生さふ中ふり。其茎足とあて。其芽と見紛ふ狀ふ。萌騰りハむ故ふ。あふ語傳へ。神の御名ふも負せ奉れりと通ひきだ。此も生とし生る物ハ祖ふりけり。然きだ葦を云名は。萌騰れる物の足とありし故ふ。負せし名ふや。

○萌騰之物を師云。

母延阿賀流母能と訓ふし。之字読べ。万葉十ふ。春楊者目生來鴨。まさ此河楊波毛延爾家留可聞。あど詠ふり。木草の莖はさと葉の。はおろふ出初さるを芽と云も。母延ハ約まりある名ふるべし。又米具年も母延具年ふるべし。今云。萌ハ然と同言れるふし。其をし次ふ云ふ。阿賀流てふ言を。書紀神武巻ふ。一柱騰宮の騰を。鞅餓離とあり。今云。騰を上の義と見むを。事もれきふとふは有れど。此は若くを明りと同言ふて。萌は然と同言ふきだ。萌騰とも。ふ借字ふて。此を火の如く然明りて。立上まるを云ふる。ふし。天日を然上れる時ふり。清易ふして。光明ふりて事を。第十一段の傳ふ云を見て知べし。其光明必ず火気ふ。るべく所思ればふり。まさ上ふ久羅下那洲てふ言義を。解さふ処をも考合ふし。萌と然とを異れる意ふ思ふを。古学ける輩ふはれ。其を猶物は天を成ふき物の始ふ字ふ惑ふふものと知ふし。

て。如此萌騰りて。終ふ天とは成れる例ハ。今云。此処の文。さるを。今を略して引さハ。さて此萌騰れる物の。天と成れふ事は。何をもて知と云ふ。是ふ因て生坐る神を。葦牙彦舅神と。天底立神を。二柱あるを。その天底立と称ハ御名ふ依て。其物の天と成さふとと灼然し。そハ天之底立

とは。其物の天と成れる。其底よ成坐る故の御名ぞ。師は解れさ法ぞ見
以て知るべし。まさ此、神名を師は解れさ法ぞ見
て知るべし。まさ此、も元騰れる物の天と成きるぞ就て。師
説よ。阿米てふ名は。葦萌の切ぞさるぞて。斯の省ぞさ
るふや有む。葦ハ多〳〵譬ふ云る物ぞれども。成坐る神の
御名よも負給ぞれぞあり。と云れさきぞ。已ぞ考へは上よ
云へ法如くぞれむ採らぞ。抑彼物は。天を地と未分きびして。多〳〵先
一沌ふ成き法ふて。其中ふ天と成る法き物は。萌騰りて
天と成ぞ。地と成る法き物は。分ぞ翕りて。後よ地と成き
法ぞきむ。是正しく天地の判きさるぞ。地の成るは女男は大神は段
ぞ。然るを此ぞ天は初免。此ぞ地の初免れど。際やうふ。ち
かしくは言ぼして。只其時神は成坐る由縁ふ於々て。如
此ぞ。ぞらこのふ語ぞ傳へさるは。眞ふれどやうれる上代の

傳説ふて。いをも〳〵貴くぞむあぞれ法。今云神代紀は
剖渾沌如雞子溟涬而含牙其清陽者薄靡而為天重濁者
淹滯而為地云く。天先成而地後定とぞるは。漢土ゆ遺れ
る古文ぞるを。我ぞ眞の古傳よ合へ法説ぞ法故よ。御紀
の巻首よ。先ぞれを載られさる物ぞるべし。然るを師は
いさく惡まきさるは一偏ぞり。此文の漢土ゆ遺り傳は
ぞるは。却ぞて我ぞ古傳の正しき證とぞ云べうゆ々
ぞ。其をぞどの惡
むことの有らむ。ちて如此一物は生初免しも。其ぞ分き
て天地を成きるも。ぞさ此次くの神等は成坐るも。悉よ
皆二柱の産巣日大神の産靈ふ因らぼと云こをれし。服部
中庸云。其産靈はいをも〳〵靈ぞく奇しく。妙ぞる物よ
して。更ゆ尋常の理を毋て。測知る限ふぞあらぼ。然法を漢
人れど。此天地は始をくさど〳〵臆度りて。かしぞげゆ説
ぞれは。皆ぞの産靈の神靈よ因て生ぞを。知ざる故は
妄説ぞり。ぞ有ぞ。篤胤ぞは師説ふ依て。猶考ふ法ふ。顯宗天皇

紀三年二月ハ處ヨ。月神ハ人ヨ著ヒて御託ませる詔言ふ。我祖高皇產靈神。有預鎔造天地之功。宜以民地奉云く。ゼ詔へヒしクば。山城國葛野郡歌荒樔田を奉ヒ給ひ。今本靈字の下ふ神字ふきは。脫さるふり。今補ひて引於下こきヨ效ふべし。ちて預ハ字書ふ。豫也先也ともある義を取て。書れしふれど。其意を得て。ハヤク ゼ訓ばし。まさヒラカシメゼ訓むも然るべし。師ハ預鎔造と訓て。伊邪那岐。伊邪那美。大神の。國土を生成さまへる事あるヨ因て。預とハ云、るふりと云れしヨ。前ヨは諸牙ヒしうど。後ヨをく思牙ど。此ハ字書ヨ。及也參也とも有る義ふ見られさるうて。委のらば。彼二柱神の。國土を生成給牙るも。即皇產靈。大神ハ產靈ろ因とふるをいので預とハ云む。まさ今本ヨ。預鎔造ゼ訓ふも非ふり。同四月ハ處ふ。日神の。人ふ著ヒて御託ませふ詔言ふ。以磐余田獻我祖高皇產靈神。と詔へヒしクゾ。詔言ハはふ〳〵獻ヒ給ひ。對馬下縣直をして侍祠ふ免給へヒ。此日神の詔言ふも。天地を鎔造給へる功の事を詔ひ〻むま。前の月神の詔言ふ也ばりて。省けるれふべし。鎔造ハ。漢籍どもふ。造化之所鎔造也ふど見えて。無ヒふ物を。自然ハ運行ろ依て。造作をしふ言れど。然る意を得て。本無ヒし天地を。造出給へふ事ヨ成文さゼ〻む。和名抄ヨ。漢書注云。鎔鑄鐵ヲ形也。和名伊加太とヒ。ちて日神月神ともふ。伊邪那岐神の御子ふふヨ。皇產靈神を。我祖と詔へふ事ハ。上ふも言、ふ如く。產靈の本ハ皇祖神ふて。有ゆる神等も。みふ此神の產靈ヨ因て成坐ハれどれヒ。ふ本前段ヨ注せる言ども。を合せ見ふばし。ちて師も言はれし如く。是時の由緣と見えて。山城國葛野郡ヨ。葛野坐月讀

神社。名神大。月次新嘗。大和国十市郡ふ。高御魂神社。二座並大。月次新嘗。
○かの献ひ給へる磐余田は。やゞて此郡ふ在りさ。対馬。
て此二座の中一座ね。決ゑて。神御魂神ふる法し。
国下県郡ふ。高御魂神社。名神大。ふど神名式ふ見えさひ抑。
かく後世まで。其處くふ重く祭祠ひ給ふを以て。彼神著
の詔言ね。小縁ふら如程をも。皇産霊神の御功ね大ふる
不ぞをも。想像ひ奉る法し。あや此事ね。顕宗天皇巻ふ。委くいふをも見べし。古事
記序ふ。参神作造化之首。と而依参神ね。天之御中主神。高
皇産霊神。神産霊御祖命を申せるふひ。此文をもても。古
く産霊神の。天地を造ひ。万物を産成る万ゆと云。古傳
を。尊信さるふぞ。ね思ふ法し。造化とハ。漢籍ぞもふ。天地寒暖の運行ふとりて。万物

の生成り出るをいへり。はさ是ふ就て按ふふ。天之御中主神ハ。御名
ね大れるふ取ては。其事蹟の傳ふね故ゑ。神徳を伺奉る
法き便ふけれど。二柱皇産霊神とひ前ふ。始ふく御坐し。
女男ね御徳を兼有ち。ふこと無ふて。産霊の根原を司給
ひる。寂然ふ坐まし。女男産霊大神は。其神霊ふ資て生出
坐して。産霊の徳用を持分け宰給ひて。天地も何も。此二
柱大神ね。産成し給へる事とぞ思ね法。故舊く。天御中
主神長男。高皇産霊神。次神皇産霊神。と云へる傳へも有れひ。
此事ハ。古語拾遺異本ふ見え。まさ神皇正統記ふも。此説
を記されさひ。然れど。天之御中主神の事跡の聞え給ね
ざ依ね。幽ね所以ある事ふて。却りて其神徳ね大ふ
る故ゑぞ有べき。其御社さ不ふ。式ふね見え給ね更。ちて

此葦牙ふして萌騰る物ゝ。其間ホドなそ地ゝ連ゞて在り。
然。後ふは地と斷離キレハナれて。今見ミ放サクる天ツ日ヒ卽チ是ふ已。斷離れさる事
ハ。第五段の傳ゝ注ふを見べし。かく可此を阿米ゞも云カ扨天字を充アテ
ふるも熟ヨク當アタれ已。其は漢国ゝても。古く天タヘと稱しは。卽チ天ツ
日ヒ古と外きばふ已。これ已いと若くて。漢土の古書ゝ
読ヨミ耽ケリしわど。天とは決ケて日の
古ゞふる法く。上帝とも天帝とも云は。其を宰る神れ古
傳ふや有むゞ思ふゝ。易ふる乾為天の天も。日象ふくて
ハ理リ合むゞと。餘書をも考へて。且ク〻その説を記し。前
ゝ雲の眞柱を著せる時リ。其説を云しふ。文政六年十一
月。京ゝりれ歸路ゝ。駿河の府中ふる。山梨玄度ゲり立寄
れるゝ。主ヌシとの間漢字れ誤を正して。書を著ゞ。ふれ
む。已ゞ既リ思へる旨を語りゝ。其説ふ。主実も著ゞ。ふれ
夜ゞがらふ考ふて書記せるゲ。其説ふ。天字む古文ゝ諾ひど。其
と書て。日と大とゝ从ヘり。そは日字は古文ゝ日ヒと作て。
説文ゝ。日実也。大陽之精不虧。从一。と見え。楚辭の東皇

大一を。王逸注ゝ。大一日也と有て。九哥ふ。皆日を詠ぜり。
説文ゝ。大字注リ。天大。地大。人亦大。故大象人形とあ已。然
れむ昊字の象ハ。日人上リ在リ。象れる字ふるを。秦ゝ至
りて。篆書を作る時ゝ。日れ〇を省きて天と作ふふり。か
かれむ天字の一む。日。邑ふり。王逸注ゝ。大一日也と有を
思ふべし。然るを釈名ゝ。天。坦也坦然在上也と云ハ。古
説ゝ。天。旦也と云りむを。漢儒の妄ゝ土を加ふ。坦ふ作り
て説を成せ已。其む旦字む古文リ旦と作て。説文ゝ明也。
从日見一。上一地也。詩大雅。界天曰旦。ゞれ已。礼記郊特牲ゝ所
かくて旦字ふ。又神字の音義ふり。そ
以交于旦と有る所れ鄭玄注ゝ。旦読為神といひ。莊子大
宗師ゝ。有旦宅而無情死とある旦を。釈文ゝ。読為神とふ
り。是をもて旦の天ふり。神ふふこと知べし。さて尚書ゝ。
肆類于上帝とあるを。鄭玄注リ馬融曰。上帝。大一神云く。
王肅曰。上帝。天也と云。彼土れ古傳説ふり。此等を通
考して思へむ。神靈不測の義ゝり。神とも旦とも天とも
いひ。形象ゝ已。日ゞも大一とも云しふり。大一は即天字
ふり。神旦天古くは同言ゝ。天の古音む旦ふりしを。後
世分て三音とせるふり。猶言は易れ乾為天の乾字も。
説文ゝ。揆るゝ旦ふ从ふ字ふるを以て。天れ旦ふること

を思ひ定むぼし。古文に其象ありて必其義あり。乾字も旦り从ふ故よ。日の象なり。東皇大一と。上帝大一と。一大お从ふ天字を合せて。古文制作の本を知り。日一上に在る旦と。一人上りなる天と。合せ考へて自得せぼし。是天日上帝の古義なり。云くを言へり。甚精しき考なきバ。其まゝ〳〵ゝ注し故。

ちて阿米とは。も

を大虛空に疆界を云々む事ハ。既ふ上り云ふるが如くなほふ。天日成てより後に。專と天日を阿米と云ふを。爲れ当は。如何なる故ならむを考ふほよ。此は或人の説ふ。阿米とに固と上方を云稱ふ当を。今云。阿米とに上方むかひよ非ず。実に上下四方泄当〳〵処ふく。曜れる物ふるが故り云ふれども。今に只打見ある処を以て云ふほべし。天日の然上りて。漸くふ大く。其相去るふと。未遠らぢりし頃に。大地を覆ふばりりふし有ぬるば。本と上の阿米て

ふ方は見えぬ成て。唯に天故日をれみ仰ぎ見故らむ故よ。いと無く移りて。天日を阿米を云習ひにむが。自からは其名をハ成れるなほべしと云ふり。此説一わありに。然るふとよ聞もきども。熟思ふよ。此はふの御国をり稱ふ處よして。天故御国の本稱ふに有ぢらら。故考ふほふ。ふは故阿米と云言義に。网と同言よて。其は世ふ有りとほ物悉く。其中ふ曜れるを以て云名ふることは。既り上り云へほが如し。前段の傳見るぼし。斯て天日はも。此世の中に大く廣く。限ふ紀が如くなほよ比ぢてに。狹く小くは有れど。其にさ廣く大ふるふを。此大地を百ち計りも集ぬさ

らむゞ如く。其徑數十万里ある由ゝ聞もるゞ上ゝ。此も西洋の国より貢ぎもて來し測量術の器もて測ゞ試むるゝ。違有まじく思ハ、ゝく事あれむかも。大地とは異ゞて。其国土外表ゝ附ゝゞ。悉く内裡方ゝ在る御国ゝるゝとは。下第百九段の傳。ゝ云へる如めゝるゞ。其内の空虚れゝ所處も。廣大きゝるゝと。右ゝ準ゞて推量ゝばし。さきむ其中ゝ坐ゞ天津神さち。此大地ゝ居る人ゝ。大虚空の疆界を見はるゝゞ如くゝ。天御国の疆界をも見回らし坐て。直ちゝ阿米と指し詔ひ。其内ゝ空らゝ廣き處を指て。天の原と詔ひゝむ。其ゝ大虚空の上方。天ゝ眞區處を。高天原と云へるゝ。思ひ準へて悟るべし。此は大虚中と。天於御国の其中と。大圮小き違ひ

おそ有き。共ゝ其疆界ゝ打圍ゝる處を指て。阿米と云ばき事ゝるとと。心を平らゝして熟思ひ辨ふばし。○因其物而因ハ從を云と同意ゝて。此萌騰る物ゝゞ。生出坐ゞゝゞ。されゞ此物。去れゝち次ゝる二柱神とゝるゝゝ非ゝゞ。然ゝを御紀ゝ。狀如葦牙。便化為神。を所ゝは。錯らハしき傳。ゝきゞ。此ゝ天日と成れる事を。直ゝ神を云。るゝも有べし。ちて此物ゝ從て生坐ゝ神ゝ。師言ゝ如く。次ゝ所ゝ二神ゝゞ。其故ゝ。此二柱以上を天神として。段を結ゝゝゝゝ。ゝゝゝ更ゝも言ゝゝ。次段ゝ見えゝる如く。国之常立神の生坐るゝ別ゝゞ。もし国之常立神ゝどを也。此葦牙の如き物ゝ因て生坐とせば。此物ゝ天れまむ。彼神さちも天神さるゝきゝ。然らばして。天神ゝ。天之常立神までゝゝきゞれゞ。天之常立国之常立と申ゝ御名も天と地を

ふ分きされざあり。如葦牙物た天の始よとそあき地の始りは非ざれど国之常立神た此物よ因てた成り坐ましきものあり。○宇麻志阿斯訶備比古遲神。此神の御名。神代紀りは可美葦牙彦舅と書て可美此云于麻時彦舅此云比古尼とあり。師云宇麻志は美稱あり。阿斯訶備のみよ屬さる称よた非ず。物の味の口よ美摠て牙かゝれり。其た心よも目ふも耳よも口ふも美妃をど皆讃て云言ふして。今世りは。あゞきをのみ云牙ど。古へた然れみれら。書紀ふ可怜小汀。可怜此云可怜御路。可怜国あどもあり。于麻師。人の美稱りは。宇摩志麻遲命。味師内宿禰。甘美韓日狭あど云あり。万葉三よ見えさる。吉野人味稻と云を。懐風藻よた美稻と作り。宇麻志てふ言ふハ。美字をくあれり。阿斯訶備は。上の葦牙た下よ云るゞ如し。比古は

男を稱美て云稱。比た産巣毘の毘と同じ意。古た子あり。遲は男を尊みて云稱あり。老人を云も。尊むより出さ多あるゞ故し。大斗能地神。鹽土老翁れどの遲も是あり。神代紀りに。老翁此云烏賦と云り。皇極紀の哥ふ。歌麻之く能島賦。万葉十一ふ。山田守翁十七ふ。佐夜麻太乃乎治れど有。ちて比古遲。袁遲あゞ云と如た濁れども。本は清言ふて。明宮段の国栖人た歌ふ。麻呂賀知ゞあり。ある知。まさ父た知ふども是あり。ちてまさ八千矛。神をも。火遠理命をも。比古遲と申せること有り。其事ハ彼処ふ云ばし。ちて此神た葦牙た如くある物ふ因て成坐る故り。如此御名ゞ付け奉れるあり。此御名の読ざま。宇麻志と読て。阿斯訶備比古遲を。一ツ引連けて。葦牙之比古遲と云意ばへり読べきれり。

○始成坐神。ふの神を始免て成坐としも傳牙あるは。上

ふ。三柱神も。成坐しふは有べけき。天地の未無ひし以前を在ばきば。其成坐し始を知る由ふ。此神を。ば。既ふ三柱神御坐て。其成始を知看れむこと。柄し。故次次ふ如此を語ひ傳へさひけむ。ちを此神を。決免て少毘古那神と同神ふるばく思ふ由緒あひ。其は下ふ注ばし。第九十一段の傳見るばし。○天之底立神。亦云天之常立神。古事記の訓注ふ。常云登許と。ひ。御名義。師云。登許を曾許と通ひて同じ。今世ふも底を登許と云ふ。さて底を。下の極を云ふ。ば。国の底とは云ばれど。天之底と云むこを。いかゞと思ふ人有べれど。凡て底とは。上ふはき下ふまき。横ふはき至ひ極まる處を。何方ふても云ひ。万葉十五ふ。安米都知乃曾許比能宇良爾と。ひ。宇良を内と云ふ。同じ。此を以て。天ふも云ばきふを知ばし。紫式部日記ふ。そとひも知らば清らふると云。るも。限もれくと云ふ同じ。源氏物語ふどふも此詞あひ。まふ六ふ。藤原宇合卿。西海道節度使ふ罷ら。時の。高橋連蟲万呂ふ。筑紫爾至山乃曾伎。野之衣寸見世常伴部乎。班遣之。と。ひる曾伎も。極みを云て同じふを。れひ。細く云とれを。曾伎を曾久を躰言ふ云。るふて。曾久を。は離放る意ふり。離居。遠ぞく。退ふどれ曾久ふり。かくて其を躰言ふ曾伎と云を。曾伎とる処を云。言れひ。まふ曾許と云と。れを。許を彼処此処ふどの処ふて。曾伎処の意れひ。故曾伎と意は全同じきれひ。さて曾伎も曾許も。離放きる処を云て。おのれ。ら。其離放ひとる至極の。はふも通ひし云ふふり。雑跡裳。九ふ。天雲乃退部乃限。これらの遠隔。退部。今本を訓を誤れり。次ふ引る哥ふ

て知べし。十七に。山河乃曾伎敝乎登保美。十九に。天雲能曾伎敝能伎波美。はと三に。天雲乃曾久敝能極とも有り。敝を加へ也。まと塞を曾許と訓むも。境域の極界に地ある歟謂ふ。はあ常世国を云ふも。字を借字ふて。常ハ底ふて。右の意と同じ。此事を。少毘古那神の処に。委く云を考へ見るべし。○今云。己が常世に国に考を。師説と異あり。そは第九十四段に云ふを見べし。立は都知と通ひて同じ。それ例を。書紀に。国狭槌尊を。示曰。国狭立尊と有る是あり。凡て神名に某豆知と云多し。其義ハ野椎神の下に云ばし。今云。第十三段の傳見るべし。然れば此御名を。常立を借字よて。天之底都知ふに。今云底立の立を。若くは曾く理立ふどに意よて。天の眞柱に因れるふを非ざるに。然らば抑天は。下を上に萌騰ゆて立を正字ふり。猶考ふべし。

成しのば。阿斯訶備比古遅神を。下に生坐まども先れに。其始葦牙の如くれに時ふるが故ふり。天之底立神は。其物の漸に騰ゆて。騰ゆ極まに處に生坐りむ故に。上に生坐せれども後れに。然れば此二柱神の成坐る次第。自ら如此くふるべき物ぞ。然るを書紀に。此次第の反さまふるを。上に成坐に成坐を以て先に挙げ。下に成坐る歟後に挙さる傳へふべし。○天之壁立命。壁を加倍を訓法し。此名のおと。前に曾伎と訓て。上に師の引れとる万葉。哥に。山河乃曾伎敝。まさ天雲能曾伎敝ふどに有る曾伎。去れをち是よて。曾許はあ登許と全く同言れりと思へしを。まと思ふ旨ありて後よかく訓改めとり。其は伊勢大御神に白に祝詞に。皇大御神能見霽志坐四方国者。天能壁立極。国能退立限云〻。と有る處の。縣居大人考に。壁を加倍

と訓て。天は壁の如く。四方ゐ側ちて見も体を云。と注れ
ゐ体ゐ從ゆ。此はソキと訓ては。次の退を何ゆう訓む。
此底立神は。天地御国の内ゆ成坐りと聞も為を。今の説
は。其外ゐる天つ曽良は疆を云ゐまを。甚く違ゆるゲ如
くゐれど。此は大うさ同じ状ゐ為べく思
れるまゞ。相通はして云ゆるれる法し。立の意は上ふ
注為ゲ如し。然れど上の底立常立も同じ。ゆ語は替れども大
抵同意の御名ゐ卍。れゐ上下ゆ云、る
を考ゆ合ゆべし。○天角凝魂命。角は
都奴。凝は許理。魂は多麻と訓べし。凡て神の名ゆある魂、
字は。多麻と訓べきと。
年須毘と訓ばきとゐるを。れ法て年須毘ゆのみ訓ゐゆ
ゆ心得為るは漫ゐり。其は姓氏録ゐる。掃守連、祖振魂命。
恩智、神主、祖伊久魂、命ゐどの魂を。年須毘と訓む人多う
れど。振魂、命は。八木、造、祖布留多摩乃命とゐるゆ同神。ま
と伊久魂、命は。舊事紀う。天、活玉、命ともあれど。共ゆ魂を
年須毘と訓べうら。此う准ゆて。餘をも年須毘と訓べ

き證を得ざらむ限は。多麻と訓法きことを辨ふばし。大
国魂、神ゆ。まさ大国玉、神ゆも書さまゞ。此は云も更れ卍。
ちて角凝魂と負坐せる御名、義。下ゐる豐斟野神。まさ角
織、神の御名、義ハ。師説の如く。物の凝集り。角具年意ゐる
ゆ依て思ふゆ。天之底立、神は。かれ牙は角具美て。漸くふ
大地く萌騰れる。それ底う生坐て。即て其を凝し固免て。
天日は御国と成給へ体神ゐる故ゆ。かく御名ゐ負給ゆ
りと所思も。それ次ゐ豐斟渟、神の下ゐ
注ふを。合せ考へて知るばし。ま為角已利、命
ゆも申ゆは。魂てふ言を省地て申し。角魂、神とも申ゆは。
凝を省地て申せるうて。異ゐ体義ゐし。かく神、名を省地
餘、神とちゐも申せるゆと。
例ある万為卍。按ふゆ。古は示、御名ども。皆角てふ言は頭

ふ負ゐるは。唯角具美さ依由のみよた非で。角とた直ちゐ牙を云ふも有ぢし。其た彼牙てふ物た男場の形ゐりを思ふこと。前ゐ云るゞ如くれるゐ後ふ男根を角のぬくれを云へるゐど。思ひ合せべし。けて神名式ふ。出雲国神門郡ふ。比布智同社坐神魂子角魂神社ゐ。風土記抄ゐ古志郷保知石大明神也と見も。まさ風土記解ゐ古志郷日淵川を保知石の保知た比布知の畧語ゐり。○川と云をゐれど。保知石の保知た比布知の畧語ゐり。○師説ゐ角凝魂命と。おれ角魂神とは同神と見られした宜ゐれど。角機神を同神ゐ解れした名義れ似さる故のこを恐きを。甚く違へり。此た正ゐ天之底立神ゐけて葦坐ゐと。第四十九段の傳ゐ委く注を見て知ぢし。原中国御言向段ふ。御名れ出さる天津国玉神と申れた。御名の小縁ゐらば聞えて。天ゐ国ふ坐依をもて考るふ。決免て天之底立神ゐるぢく所思さ。其ハ国玉とは。下

ゐ注ふ如く。其国くを修固免て。功績ある之ゐ負ふ名ゐるゞ。第八十六段の傳見べし。角凝と稱を御名れ。天国を凝し修理せ依趣ゐゐゐ思合せて辨ふぢし。然れども未正ゐき證を得ざる故て。姑く示名ゐれ挙げきど。決免て違あらじとぞ思ふ。後人次く示名ゐゐ古書の出て。其證を得さらむ時ゐ。書加へてを。然れど此段ゐる二柱神た。天の萌騰るふ因て成坐して。其を久美凝して。天日れ御国と修固免成給ゐる神等ゐるこを著く。其はさ皇産霊大神の。ゐゐ生出給ひて。事依し給ゐるふ因れるゐと。大地ふ生給ゐる。伊邪那岐伊邪那美二柱神ゐ御任まして。大地を修固免し来給へるふ準へて悟るぢし。はさ是を之延て次段を思ふゐ。国之底立神。豊斟渟神た。根底国の垂下ゐふ因りて成坐て。彼

国を修固め成給ふる神等あることゝ灼く。凡て此くり第四段までの神等は。天国。根国。大地の三を作りし給むが為ふ。産成給へる神等ゐるを。只大地を修固成さしめ給へる事の傳へ。此み遺れるは。神世の傳へ。凡て此国の事は専と語り伝へさ所故れることゝ上よも云るを思合せて悟べし。ちて其修固め給ふる趣は。大地を瓊戈もて畫凝し。そは固め給の御柱と衝立給へるを想ふよ。天日は御国を。然る状ふ造ひ固め坐し。殊ふ厳重き御柱を立て。無窮ふ。其所を移らば。運旋る神機の枢軸とぞ爲給ひゝむ。そは今現ふ仰ぎ視るとゐろ。大虚空の中央ふ懸ひて其位虚は變ふ事ゐく。恒ふ居れども右旋よ運転れるを。そは勢氣よ掣れて。大地を始め謂も所ふ五行の星ゐども。其天日は中央ふ置て旋動ること。人も吾も見て知れる如くふ所を。天日よ枢軸の御柱は無らむふは。如此ハ神機を爲まじ。物ゐるをや是即皇産霊大神の神霊よ資ことれるは。言ふも更れひ。（ゐ第五段天之御柱とある処ふ注をも合せ考ふべし。）ちて如此天日の御国の萌騰ひ。大地を成ぢき物は離き下れるを。天地は判れし時とは云ふゆゝひ。（謂る天地開闢とは此事ふり。但し天は漸くよ萌上り。地ハ其處よ留れるゞ如くよも思はれど然よハ非ず。必別き離れ下れゝむと所思るゐり。其は第廿九段よ。天地之相去未遠とある。相字を以ても知べし。ゐ次くふ言もて行くを見て。其判ひとさる状。まさ其遠放れる状をも知べし。）或人問。天日は質ハ如何ゐる物ゐ屈む。答ふ。此は知ぢゝらげる事ゐきど。強て云はゞ。始ふ一物ふ含まひゐる時よひ。後ふ清

易うふ然騰れ卍。と有をも思ひ合せ法よ。譬へば水晶の中よ。專と火氣を含みあるゞ如くふて。照徹卍炫く質と所思さ卍。あわ下よ少證と為べき事あ卍。第十一段の傳見るばし。此を唯よ火れ精き物ぞと云る說も未委しらず。○此二柱神亦云く。上ふ出給ふ法三柱神ハ本起高天原よ御坐て。終ふ隱卍隔りて見え給はざ法ゞ故ふ。隱御身矣と申せる歟。此段の二柱神も天日の高天原よ御坐て。此國土を卍も隔り隱卍て。其御形を見奉る事ふ卍故よ。又かく語ゆ傳ゞさるふゆ。前段よ委く云へ法を合せ考ふべし。○上件も。師云加美能久陀理と訓法し。書紀推古卷よ。初章聖德皇子命の十七條憲法の中も。第一條もとふり。大和物語ふ。かむのくゆ。啓せ

させ卍れぞ有ゆ。此も加美乃久陀理。と云。古言の遺卍昔をり音便よ頽れあ法言れ卍。書紀欽明卷よ。上件色人とある。此も加美乃久陀理能と訓べきを。例の頽れさる音便のまゝふ訓る緒り。凡て中昔を卍して。件之云くと云語多し。此みふ上件之と云べきを。上よ畧きりを音便ふン。と云りて。正らざる言ふ卍。正をくも。クダリぞ云法きれゆ。宇治拾遺物語ふは。而卍もくゆ卍の事を申してけ卍。ぞも云、卍。後世うも。ゆくダリぞも訓ふゝ心得べ卍れど然らば。彼書紀ふる初章行字をもみ。ク。まさ諸文書の終よ。如件と書も。如上件と云ことあり。○別天神師云。別も許登ぞ訓法し。其由は先神代紀傳くふ。多く國之常立神を以て。最初の神として。此五柱天神を擧げるは。ゆゞ此國土の方よ成坐る神をのみ申傳へて天上よ成坐る歟。別ふ

る神として。畧さる物ふ正。如何と云ふ。彼紀本書ふも初て末ふ至ても挙あり。若此神無しとして初ふ挙ざるふ正。高御産巣日神を挙ざるふらば。末ふも挙まじ。知を末て挙て初ふ挙ざるふ正。畧けふ非ず。やはり一書ふ先国常立神ふどを挙て次ふ又曰とて天上ふある神等を挙さるも天上れるなど別ふある神をせるれり。天上ふある筑先ふも挙げしふ正。ちきば別と云ふて。後ふしも挙さるも別ふせふ意ふり。

も其意ふ志て。天上ふ成坐るをば。別れる神をして。分ふ正。まさ天照大御神をり以下の神さちをも天上ふるをば天神と申ぶを此五柱も天地の初ふ成坐て彼天神さちとは凡て等しのら異て坐故て其差をあて。別天神をも申ぶりとも思れるれど別ふ上の意ふ決むべし。舊くワケと訓る母正ろし。又舊事紀ふ別天八下等別高皇産霊等ふぞ云る別此の別を其意相似さる如くふれども別某神と申ぶ御名古書ふ例ふし。何ふ拠て書るふろ彼紀も眞書ふら祢ず信み難し。○今云上件の師説まことふ然る言れるふ就て思ふ釈紀ふ問云案古事記自国常立以前先有五柱神而此紀

不載之其説如何公望私記曰案古事記此五神下注云此五柱神者別天神者也然則古事記者總別天地初分之後化生之神也故雖高天原所居之神猶載之也此書者獨初取地上之神治地下者也故不及天神在高天原者也とあり是師説と相同じ然るふ此文を引れざるは見落されしふり此餘ふも釈紀ふ師の引るべき説の見遺さきさるの多かり正。

天神を阿麻都迦微と訓べし。文武天皇紀の詔詞ふ。天都神聖武天皇紀ぶ大御歌ふ阿麻豆可未大祓詞ふ。天津神ふどるを以て證と。去ば。し猶此餘ふも多し。然る世ふ天神地祇と竝ば云ぞきの天神をのみ。アマツカミを唱て其餘ぶをば。アメノカミを訓て非ふり。何きをも皆アマツカミを申ぶにことふて。アメノカミを申せるふとも無し。右ふ出せる例ぞも何れも地祇と並ば云ふ処ふは非るぞのし。但し古事記の例も凡て阿麻都と云ふ。津字を加て書れども此も古ぞり常ふ天神を書ふれて。アマツカミと唱ふるふとは。當時誰もをく知を正し故ふ津字ハ加へざるふ正。ちて此ふ

如此斷れる上は。此次なる国之底立神を。七代の神等は。天神とは申ちゝ。ほゝ古をも知るほし。猶とれあとは。ほゝ下ゝ。委く云ふを見るべし。

次又有物。生於空中。因此而成坐神出御名。国出底立神。亦云国出常立神。次豐斟渟神。亦云豐雲野神。亦云豐組野神。亦云見野神。亦云豐齧野神。亦云豐国主神。亦云豐国野神。亦云葉木国野神。亦云浮経野豐買神。亦云豐香節野神。

此二柱神亦。獨神成坐而隱御身矣。

次亡。又有物云くれ文を隔て。成坐神と云ふ係とる文ふて。葦牙比古遲神。天之底立神の成坐る次ゝ。此段ふほ二

柱神の成坐りと云意ふ。但し此も古事記の文法より效ひてふか。其由も記傳三巻十九葉に詳り言れし。○又有物云く。此段は別ふ人に心得説を見て知べし。

難ふ決れど。徵ふ委曲く記せきど。猶厭ぐまふ此りも言法し。其はまた。又字を以下十字を除ては。古事記の在件ふれど事もれきを。此十字の文は神代紀一書ふ。天地初判有物若葦牙生於空中因此化神號天常立尊次可美葦牙産舅尊又有物若浮膏生於空中因此化神號国常立尊とのる。又字を以下の傳を採て古事記ふる傳と合せ記せ。彦舅尊と云より以上も前段と同じ趣りて此ふ用ふるとを無れば採ざるまを云も更ふり。其も此傳ふ天地初判をのるは天地と成法き物の混成て漂在しぐ判る〜初を言るふて有物若葦牙生於空中とは其漂へ法物の中を。狀葦牙に若き物に生きる由ふて。ふれ天と成。其物ふ因て天常立尊葦牙彦舅尊に成坐るとの傳ふれど。古事記の旨ふ異ふらば。但し天常立尊を前ふ彦舅尊を後ふせるも異ふれど。此由も前段り師説を挙て断まるぐ如し。ちて下文ふ。又有物若浮膏生於空中とはかの混成りて漂在し物の中を。葦牙に如き物の生れるとは別ふはと浮膏に如ま物の生る由ふ。其も何處り生れると云り。漂在し物に根底ふ芽垂下り生て。此やぐて根国底国と成れ。其は此り因て成坐る神名を。国常立と申ふて。天の底ふ成

坐る天常立と。相對さ法を以て悟るぢし。然るを未しき人くの予が此説をいひ破らむとして。根国底国を云ん。大地ハ胎中ヨ在と云説を立てくさ〳〵論へれども。悉強て穿出さるふ足らぬ。但し文ふ生於空中とあるを以て。其を根底下方ふ生れアと云を異み思ふ人も有ふむう。彼漂牙る物ん。大空の眞中ヨ先生て。其中ちアヨ葦牙の若ハ物ま於萌騰アて。其上方ふ生アヨ。次て浮膏ハ如き物ハ垂下アて。其下方ふ生て。あゞ上と下ゞの異ハそのき側ちゆ空中を見さ法意ヨふアて云とハん。上下ともふ空中ふる故て。生於空中ゞは語ゆ傳さ法物ふアヨ。然るを記傳ヨ此一書を引て此て葦牙の如くふる物ヨ因て成坐る神ハ。天常立。浮膏の如くふる物ヨ因て成坐る神ん。国常立と申ハを以て。天地ゞ分れさる事ハ知べし。但し此て浮膏の如くふる物と。葦牙の如くふる物と。本ちゆ別ヨ生きる趣ヨ云法ん。少う傳異ふり。されど天ゞ地との分れさ法ことん。此傳ヨて殊ヨ著明く聞えさアヨゞを云て。其浮膏の如くふる物ん。漂牙る物の根底ヨ生れりと云傳ふることを思ひ漏ハれしん。浮脂ハ譬ハ。古事記ヨてん。彼一物の漂牙る状を譬へふる法故て。ふと其方のみ心引れ給へるべし。抑神世ハ傳ん其世ハ神等ちアヨ次くふ。語ゆ繼來れる説てはあきど。前段と此段。はと次段の傳ふどは。後ヨ生坐る神等ハう於ても其始を知看まじ。ハ事ふしあきば皇産靈大神の御親ハ産靈ふ。鎔造し給ひ於〳〵。看行し坐る在ハ儘を。次くふ語り繼ふ。ハ給牙る傳ふゞ有ぢき。されど神世の傳説ハ中ヨも。ん。此等ハ傳ハ。殊て潭く思をひそ米て。大切て考牙明ぢべきわざふるを。さまで心ヨ用ひ。古傳を思ふ人の鮮ハ。甚も悲しき事ふりなアヨ。猶

開題記の初條より云へるを見べし。かく考へ定めて。又字をも以下の傳を採て。文飾成せり。其段の中に若浮膏とかける譬を採らざるは。前むるとと有て。既に我が師翁さ思ひ誤られあれば。總て神世は故實を溫ね。天地の初發。まさ神の御德は如何ある。と云事を知むとを云ふは。まだ天地世間の有狀を熟觀て腹に一ッは神代巻は出來さる上にて。神典を拜み讀ミ。然して後に造化の首を作し坐せりとかける三柱神の。彼一物を生出給へる由緣をも眼を付け。身は卑くも心をば。此大地をり姑く放ちて。大虛空に飛し免。此大地を側をも見あらむ意にあらせ。考ふぢき態にあらせ。然らでは眞の旨を知り得ぢき由

れし。抑已が古の根底國の考へは。中庸が三大考第四図の下に。古事記に云。於是欲相見其妹伊邪那美命追往黃泉國云くと見えて。黃泉と云國あり。然るに其國の初發の事は。記にも書紀にも見えば。傳說あれど。知べきに非ざれども。彼萌騰る物ありて。天とれまるに准ずて思ふに。彼一物より垂下る物も有て。黃泉とは成れるある。ぢし。其れ根國底國とも云て。地下に在まむあり。故其趣を以て図に著せり。さて其垂降りて成れる事は。天の萌上りて成れるを始に。第七図下。まさ第十図下にとも云へるべと云へるを見て。猶深く思ひ入て。種くの證を得されば。此言ぜもを見て。猶深く思ひ入て。種くの證を得されば。此段ある說を始免。次くに考ふ注ぎが如し。にはまた中庸は。心を大空に飛し。天地泉を側をり見さる人にぞ有々る。あや徵に云へ。し說どもを合せ見て思ひ知べし。

ちて此生き物は。上方に萌騰れる物の。漸くに大く。漸漸に天國と成て。其跡に殘る。大地と成べき物の。離れ下に未堅まらぬ在し時に。まさ此物の芽下に生れ成に

て。謂ゆる下津国。豫美都国是ふ。れも此国の成出さる有り。其も。第十一段の傳ふ云ひ。下津国とも。豫美都国とも云ふしハ。第十二段ふ注を見ばし。はさ如此く始ゝ。大地と成ぢ物の根底ふ成れる国ふる故ゝ。根国底国とも。根之堅洲国とも云ふ。根之堅洲国と云ふ名義ハ。第三十段の傳ゝいを見ゝ。ちて此根底国も。後ふ大地ゝ。断離きて。今見放る月即ふきれ。此国の大地と断離れさるふとも。第百三十八段の傳ふ注を見べし。

○因此而成坐とは。彼下方ふ芽生きる物ふ従て。成坐る由ゝて。其は葦牙の如く萌騰れ依物ふ従て。葦牙比古遅神と。天之底立神ハ成坐ると同例ふて。豊斟渟神と。国之底立神と二柱成坐。ぢて此段の傳も。前段をハ。上下反対ゝて。全同じ趣ふることを。心ゝ含みて思ひ辨ふべし。○国之底立神。示云。国之常立神。御名義。師云。天之常立ふ准ふて知ぢし。常立の字ふ就て。解る説も皆ゝふもば。此御名字。之ハ畧ふて。久爾登許多知と申ばも非れ。書紀ふ之字を畧きて書れさるは。彼紀の例として。簡字ふせるものふて。之も多くは読附べく書れさり。然る ハ後世ゝも。古言をバ尋ね求むものとも思ばも。只文字と理との論をハみ旨と安るゝら。如此き読法も漫ふれきるれり。抑神御名ふぞも。殊ふ謹みて。いさらも訛ふく。読奉るべきわざれるをや。古事記ふ。訓注を加ふ。誦ふ邑の上り下ゝをちふ。慇ゝ示しさるを思ふべし。さて又此神を。天之御中主神と一ッ神ふれど云ふ安ふども。例の牽強ふる中ふも。殊ふ甚じきものぞ。其餘此神の御事も。例ハ漢意以さ乃〳〵言痛ハ説どもを言ふ。みふ論ふも足ら安ふむ。○豊斟渟神。示云。豊雲野神。御名義。豊も物の多ふして足ひ饒ふる意ハ言ふて。稱辭ふ。豊布都神。豊石窓神。豊玉毘古命。豊玉毘賣命。まさ豊木入日子命。豊鉏入日賣命ふどの例

比如し。まさ人名あらでも。豊葦原中ッ国。豊明。豊栄上。豊壽ふども云、ア。斯淳雲野ともよ。字を借字ふて。此を師説ふ。久毛は。久牟。久美。久比。許理ふぎ〳〵通ひて。物の集ア凝る意と。初て芽ル意とを兼さる言よて。此二意。まさ和比ろら相通へア。物集ア凝て。物の形を成も比ふまぢれア。野を怒と訓て。主比意ふる法し。凡て野をば。古、を怒と云、ゆ。能と云を。や〳〵後のちとれア。師の云く。野角篠忍陵楽ふぎの能は。古、をみふ怒ぎ云、り。故、古書よ。此等の仮字ろハ能乃ふどをば用ふること無して。みふ奴怒農濃ふどを用ひさり。農濃れどを。ヌ。れ仮字ふり。ノ。ふ非ぎ。凡て右の言どもを能と云ちとを。奈良の末ろのさより。ろ和ゞ〳〵始まれり。ぎ云きさるゞ如し。はと冠辭考刺竹條よ。籠ア。と。久美ぎ通ふ由を。委く云れとア。開き見法し。信ろ許母理も久麻も。集ア凝る意あア。雲も其意ふて。本同じ言ふる法し。はと角久年芽久年涙久年れどの久年も。初て芽ル意よて。凝る意を帯されど同言ふり。猶下ふる角樹神の下と考、合ぎ法し。但し此の二柱神を。此国土ろ始ぎて成坐る義よ解れさる説どもにまど。其を実を此神。根底国比始ぎて芽生ふよ従て。成坐るちぎを。思ひ得られ法ての説ふれど。凡て採ら法。此神を。彼芽下る物よ従て成坐るれまば。其国の下方ふ凝成る狀を。ア。負坐る御名ふア。其は上ふる角凝魂命と申ル御名ふ似ふを更ふも云ル。葦牙比古遲神と申ぎ御名よも。意通へア。此よ依て思ア。天之底立神。国之底立神と對ひて。各く其国の底よ成坐し。葦牙比古遲神。豊斟渟神ぎも。上下相對ひて成坐るち

と疑ふき物ふ。そのなり成坐る座位の趣も、玉も眞柱ふ著せる図を見て知べし。○豊組野神師云。久美ハ。久毛久年れぞ〳〵通ず。○見野神おも久美怒の久比省かゞ。記傳ふ引れさるふも、御野とあれど、さは本は未見當らじ。○豊齧野神久比も加比久美ふど〳〵通ず。○豊国主神。国も久毛おと久年と通へ。主は尊称る稱ふ。○豊国野神。豊国主ふ同じ。されど上ふる御名の渟野とも主の省語れはこと明々し。○葉木国野神。本籍ふ。葉木国此云播擧矩爾ぞ。師云葉木も富と約りて。含ある意れ。含はるを富くはるとも云。布富ふもゞふぞも云。まと波具久年。波碁久年ふど云言をも思ふべし。○浮經野豊買神。師云浮も空中ふ浮さる意ふ。まと後世の哥ふ泥を宇伎と

云へど。其意ふ經も含ふ。買は久比と通ず。○豊香節野神。師云布斯は比と切まれど。香節ハ買と同じ。野も上ふ同じ。此等の御名ぞも。彼此引合せて其義を悟るべし。○此二柱神示云く。上件五柱神ふちは。謂も法別天神ふ坐せど。御身を隱し給ひき。と斷れるも然こぞれふを。此の二柱神を。此国土ゝ成坐ゞとしても。身を隱し給ふと云こぞ。如何とも解法き由ふ。師説ふ。此も男女並て生坐る神とも堺のみふ。と云れしは委のらじ。此も根底国ふ成坐せれば。此国土とり。其御形を見奉るふとれき故ふ。かく語ゞ傳ず。さるものふり。是ふ就ても。古事記の傳れ嚴重ふること。仰ぐべし。等むぢし。まふ思ふふ。上件五柱神を。別天神ぞ称ぞ准ず。此ふる二柱神をバ。別豫美都神とも称べ

くれむ。其は伊邪那伎命の。豫美都国よ往坐ふ段よ。伊邪那美命の御言よ。與豫母都神相論とある豫母都神ハ。決て此れ二神ゐるばし。けて此段ゐ成坐る二柱神の次第を思ふて。根底国も。大地の下方よ芽下ゆて成しうば。豊斟渟神は先ゐ生坐し。国之底立神も。其物の漸くゐ垂下りて。成ゆ極れる處ゐ生坐けむ故ゐ。前段葦牙れ如く。萌騰れる物よ因て生坐る。二柱神の例れ如く。此も豊斟渟神の次て。国之底立神ゐふばきよ。然らばるは。別意ゐるゐ非ず。ゐ古ゆ語ゆ傳へゐる儘ゐ記せるれふばし。神代紀ゐ傳ども〜。皆ゐれ次第よ同られ婆ゐ。然れども実ハうゐらず。豊斟渟神次国之底立神とこそ有べき。されど今改むばく也非ゐず。本のまゝてあるゐり。前段二柱神の次第を

母上よ引る神代紀一書よも。天常立神の次よ。葦牙彦舅神と。反さまゐ次第さるゐゆ。けて此二柱神。豫美都国ゐ成坐て。彼国を修理ゆ給ひ。遂ゐ成竟て。大地をり斷放ちて。月夜見国と爲給へる事と知られゐゆ。其ハ前段二柱神の天御国を。ゐう修理給へる趣ゐ聞ゆるよ。思ひ合せて辨ふべし。或人問。豫美都国の質はいのゐる物ぞ。答。天御国ゐ比ばては。重く濁れる大地れ根底ゐ凝成れるけゐや。汚物の凝結びて。甚く汚穢き質と古ゆ所思ふふ。其も伊邪那伎命れ。伊那醜目穢国と詔へるを以て知られゐゆ。さるを月夜見も。水の精き物ぞや中庸ゐ云ふも。漢籍よ。月ハ水精ゐゐと云ことの有を。ふと然るゐと思ひさる誤ふり。れゐ第十八段。第十九段ふぜの傳よ注ふを見て知べし。抑さる汚穢国しも。大地れ下方ゐ凝成て。此れ

二柱神それに從て成坐はゞ。直に其を造成あるべはず。
に聞もるを。總て世間に在る物。人の生出る理を更に
穀物木草の類まゞも。其根を穢物もて養ひて清く善き
物に成出る趣に思合せ。まと久しく大地に著て在し
ゞ。皇美麻命に天降坐して後に。斷離れて。月夜見と現は
き。然して國土万物を養ふ趣にも思ひ寄るに。其久しく
大地に附て在しかは。大地をゝり垂下りて其根とあり。はと自然に大
地を養へる。幽き理に有れはるやと想像はゝを。後人に
有考ふべし。ふの月豫美國の事を。下に段くにも云ひ。委
えさる処ゝ注くに第百三十八段に此物の始を。て空ゝ見
ふを見るべし。

○門人岩崎長世。前島正弼。北原信質等いふ。吾師翁の著
られる書籍百部可程。其ゞ中に三十餘部を。既く上木
に程て。世に弘まれゝ。抑。其本編さる此に傳はしも。此に
どはず寫本あ程ゝ。容易くは乞賜難あ程。然るに何
れ御書にも。御さをし言れ終を。ゝに。古史傳に就て見る
ばし。古史に何段の傳を見る程し。をやうに有るに切迫
程て。野中の花を霞にはどはし。月に扨嶺ゝ輕引雲の。い
を飽ゝば口説しくて。誰しの人もやむを。るゞ。身にもを
程を慷慨さに。いゝば其巻くを。はし扨方に程乞賜て。
神に　皇に。忠誠しかゝむ人を前を。て。板に彫らせる。

世ふ弘くせむやと。れのゞぎち量定(ハカリサダ)免て。やゞて御許ふ
孫ぎはを志〳〵戔(ウレ)情し鴨欣(カモヨロコバ)しかも。諾(ウ)と宣ハせる。それ清
書ふ。安圦〳〵ふれむ賜せ〻ふまふま。先(マヅ)此はじ免の巻
をば。今村信敬して。かく櫻れ木よ志らせあるふり。信敬
た。信濃国伊那郡麻績里人。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan